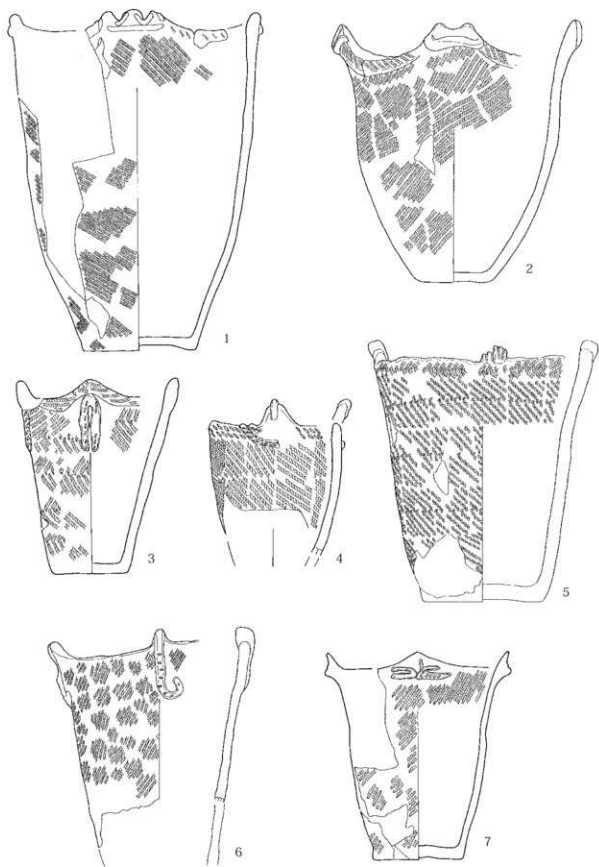
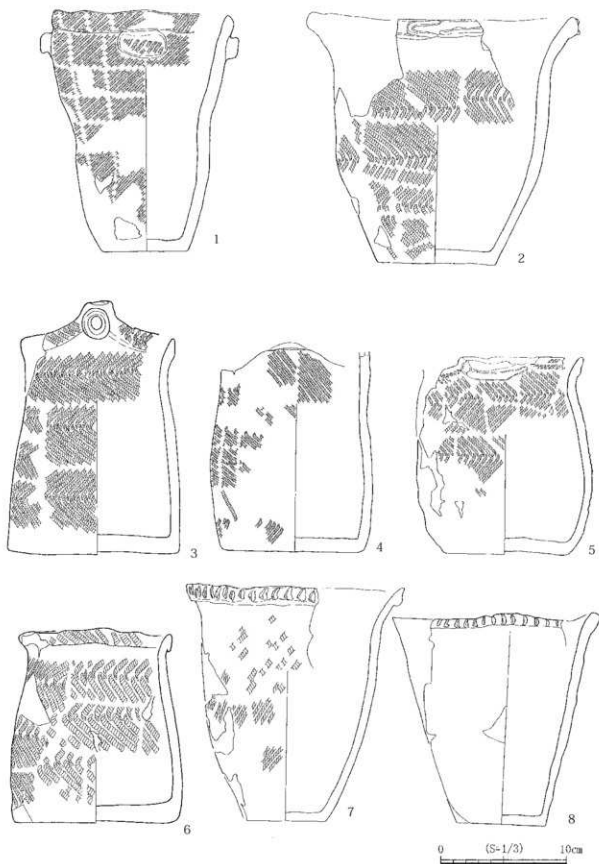


128図 縄文土器 (122)

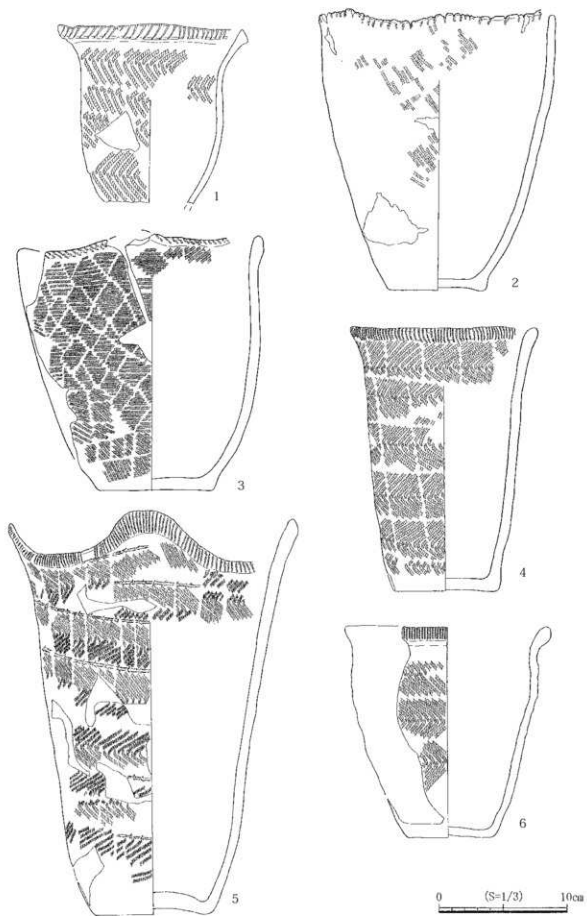


0 (S=1/3) 10cm

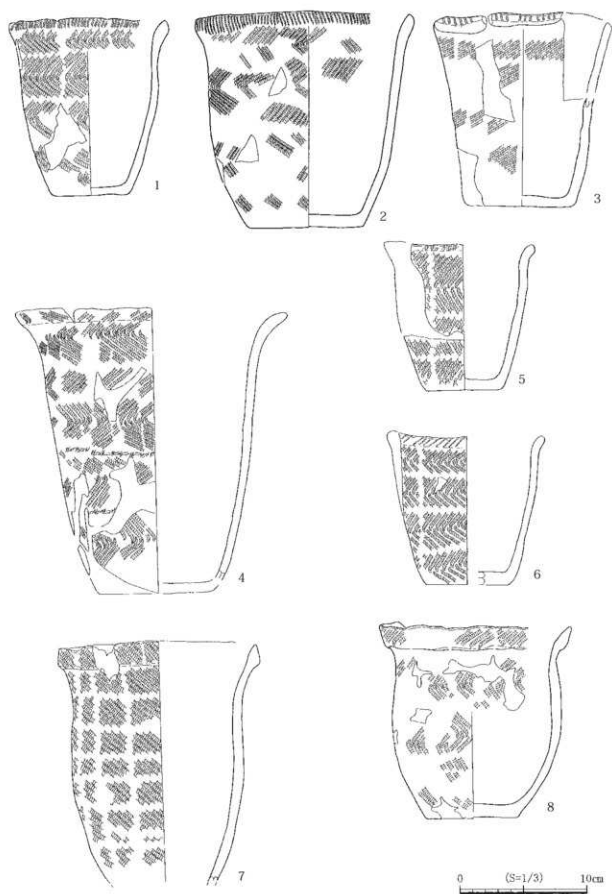
129図 縄文土器 (123)



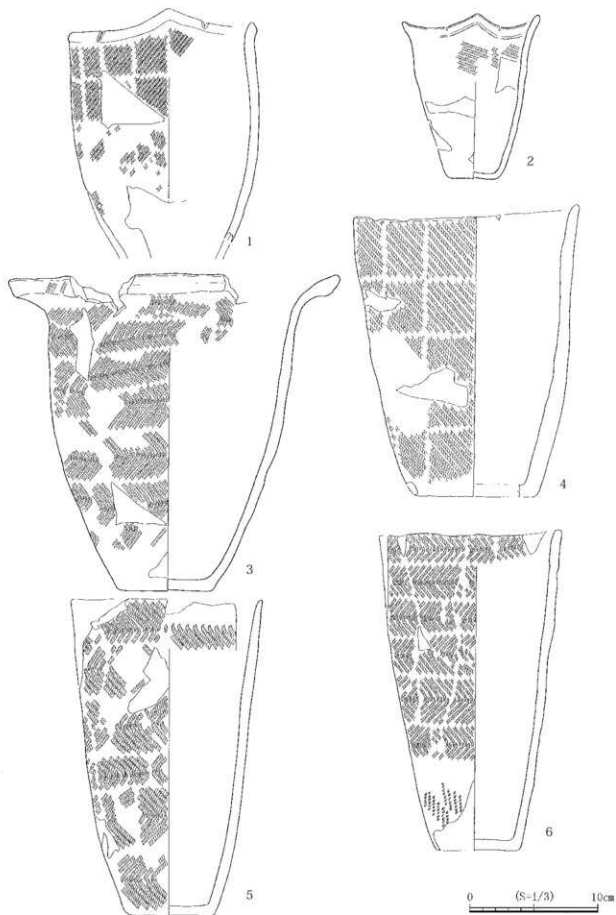
130図 織文土器(124)



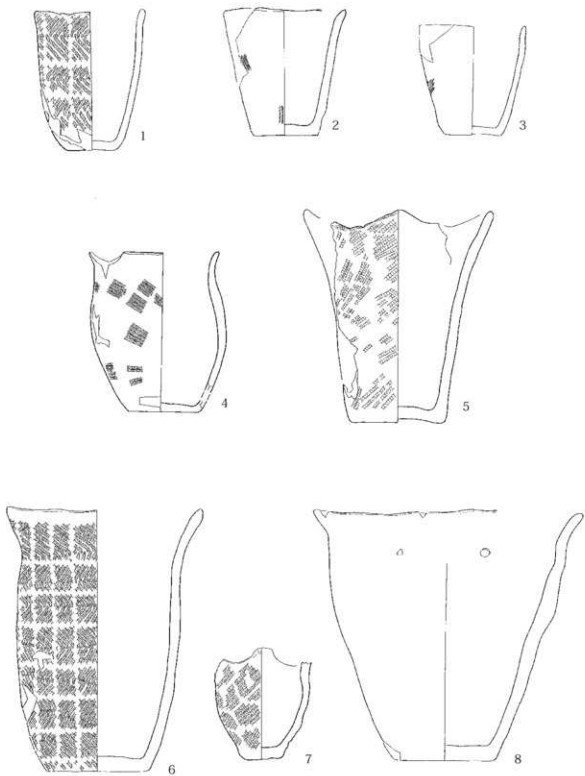
131図 縄文土器 (125)



132図 縄文土器 (126)

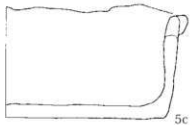
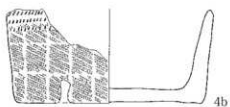
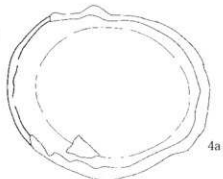
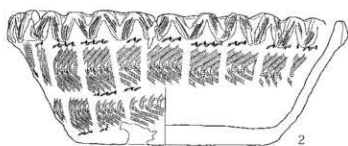
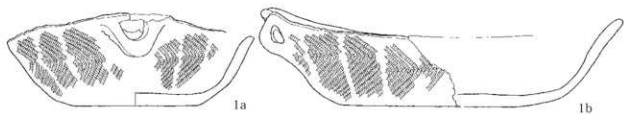


133図 縄文土器 (127)



0 (S-1/3) 10cm

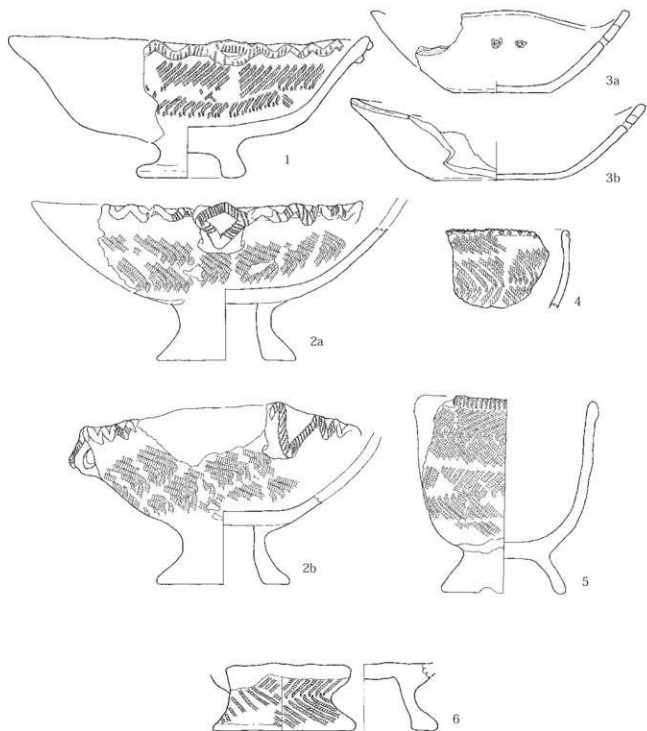
134図 縄文土器 (128)



0 (S=1/3) 10cm

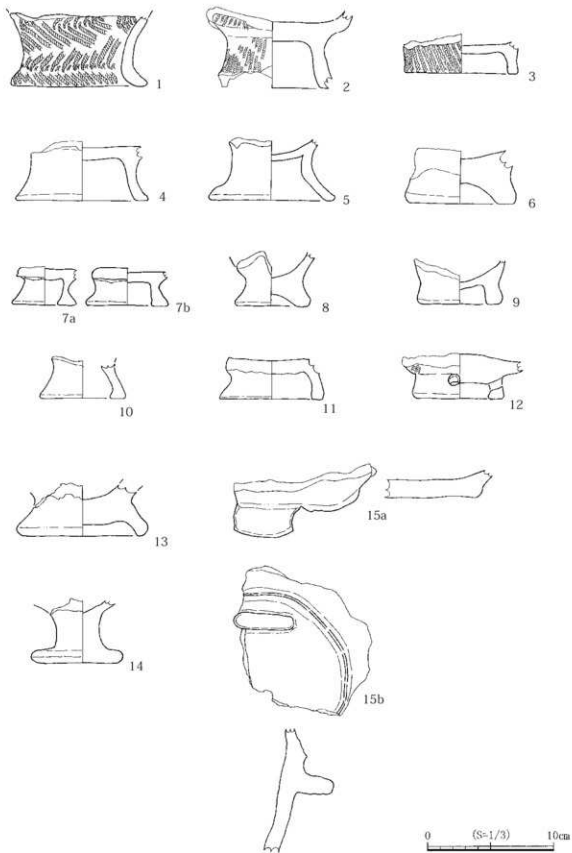
135図 縄文土器 (129)



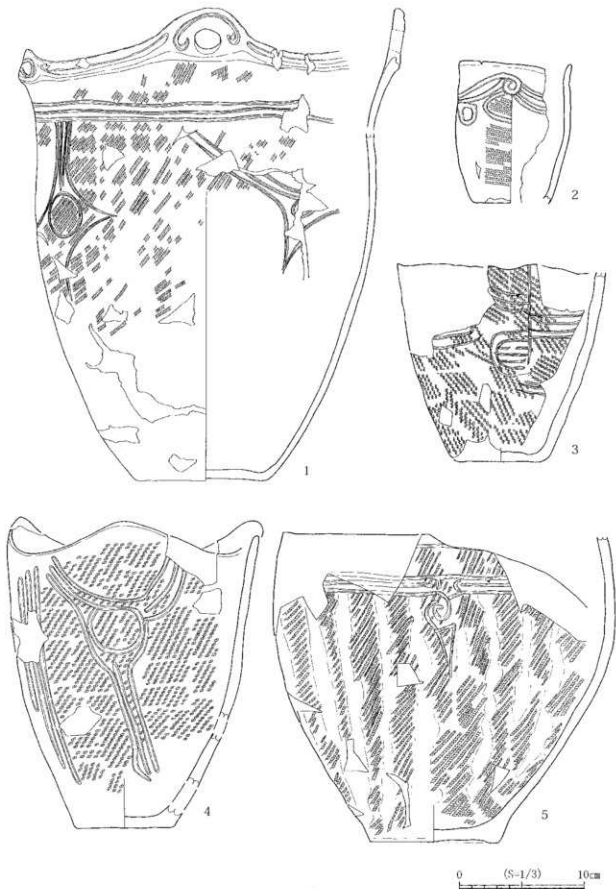


0 (S-1/3) 10cm

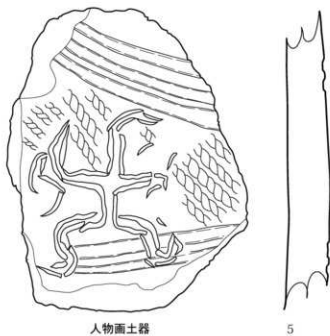
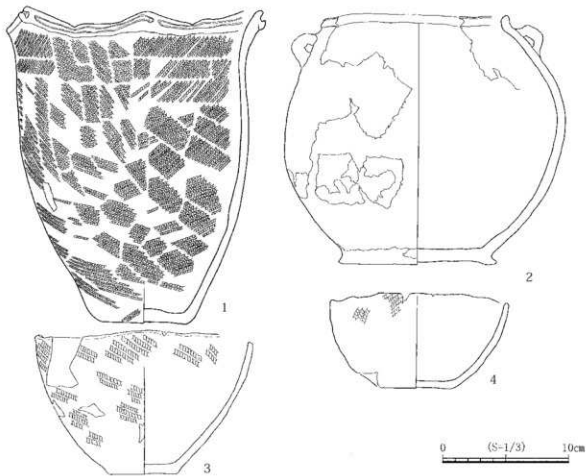
136図 縄文土器 (130)



137図 縄文土器 (131)



138図 縄文土器 (132)



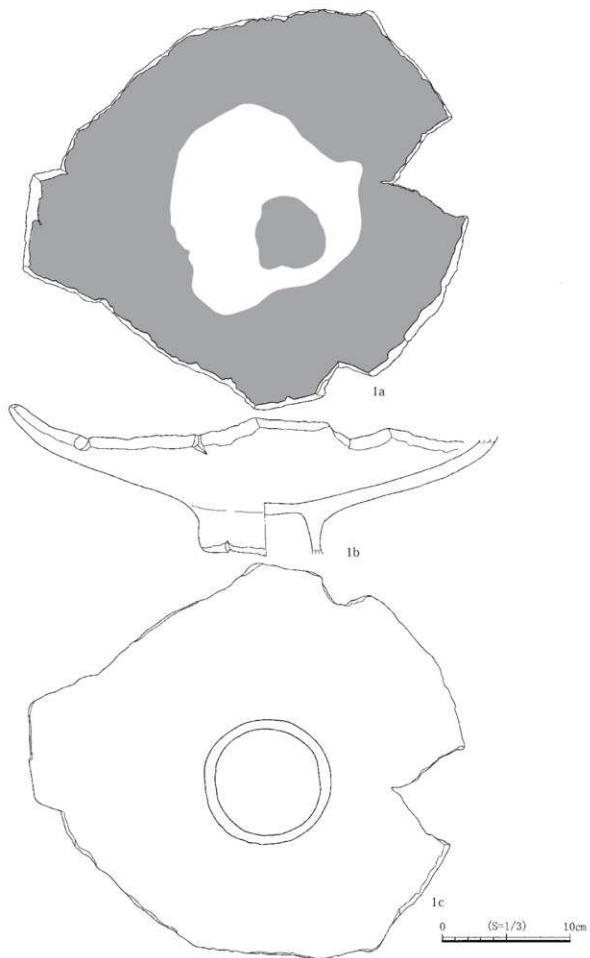
人物面土器



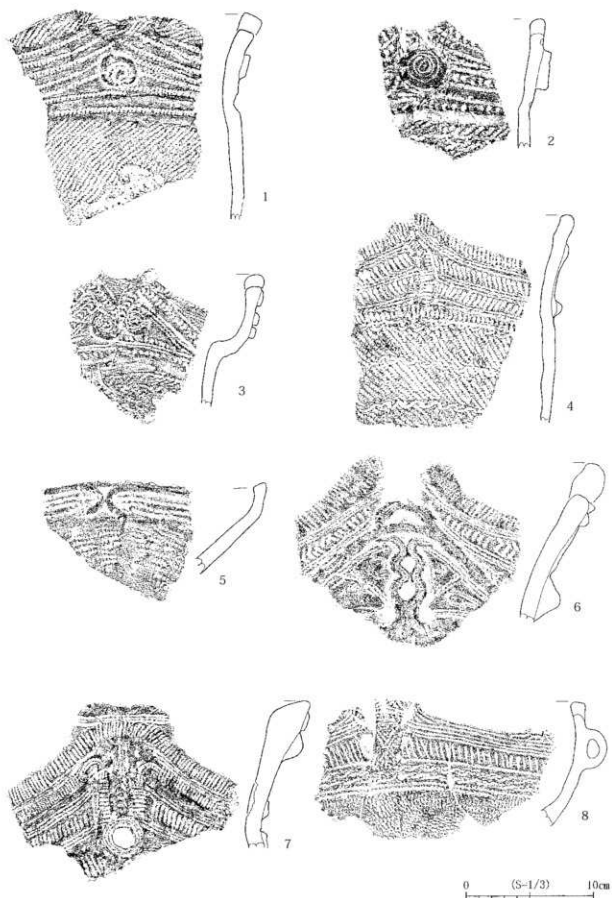
5

0 (S=1/1) 5cm

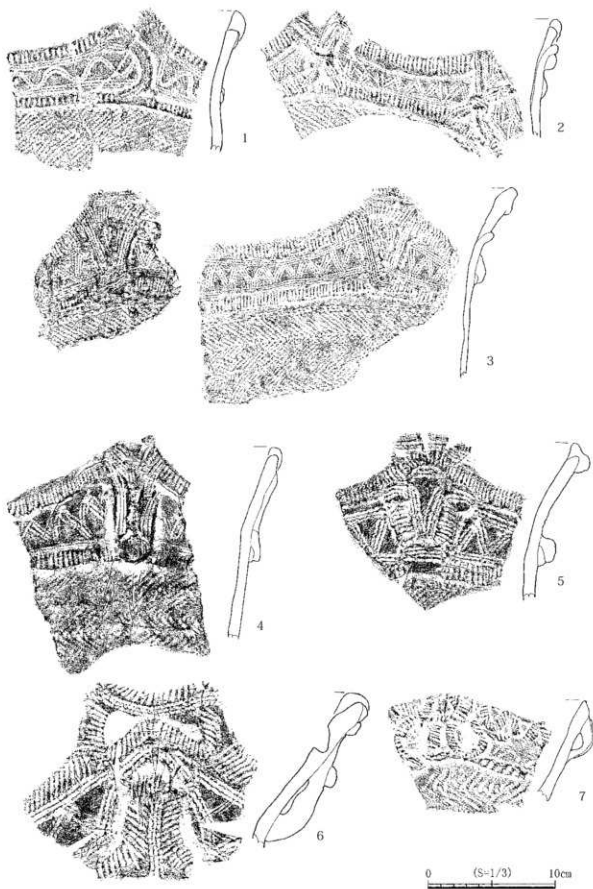
139図 縄文土器 (133)



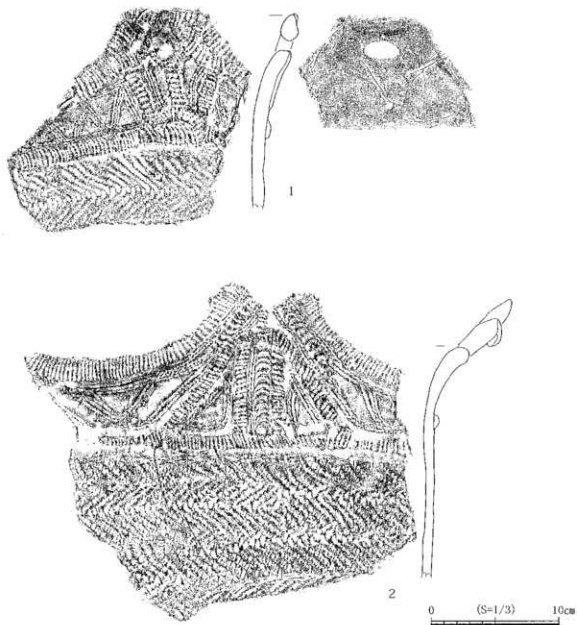
140図 縄文土器 (134)



141図 縄文土器 (135)

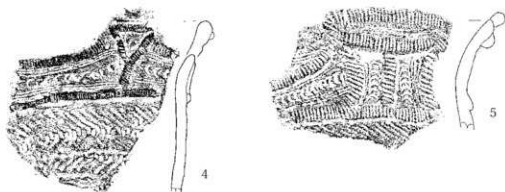
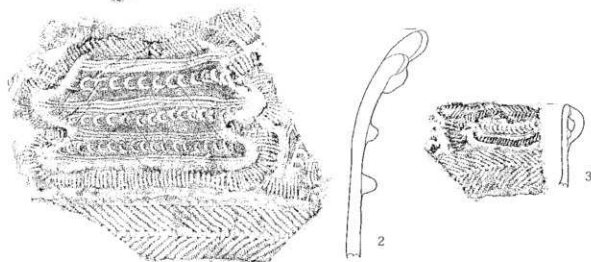
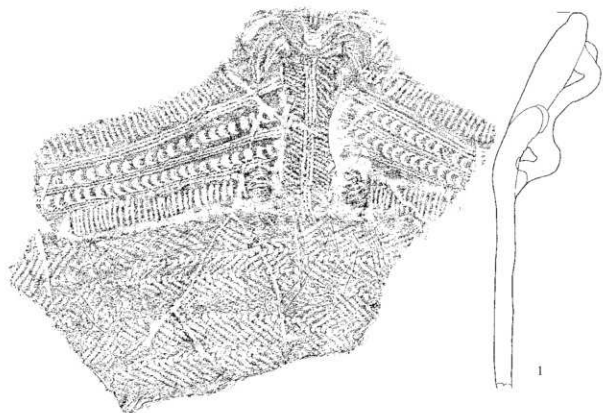


142図 縄文土器 (136)



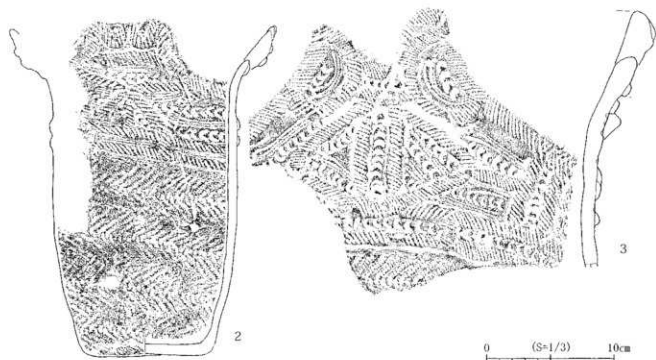
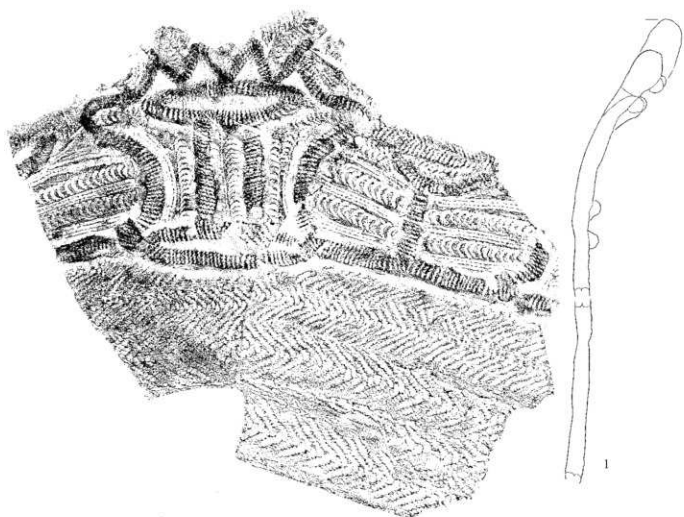
143圖 繩文土器 (137)



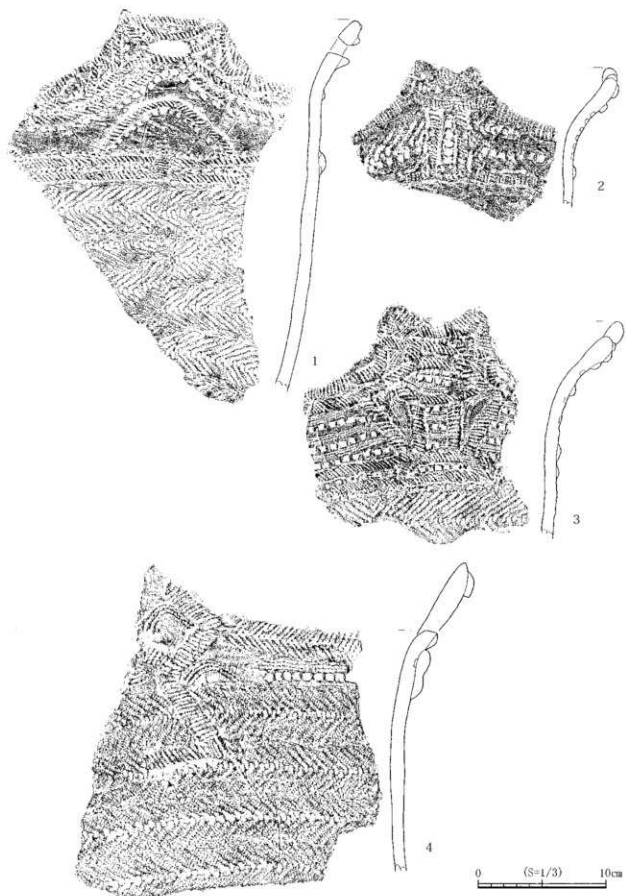


0 (S=1/3) 10cm

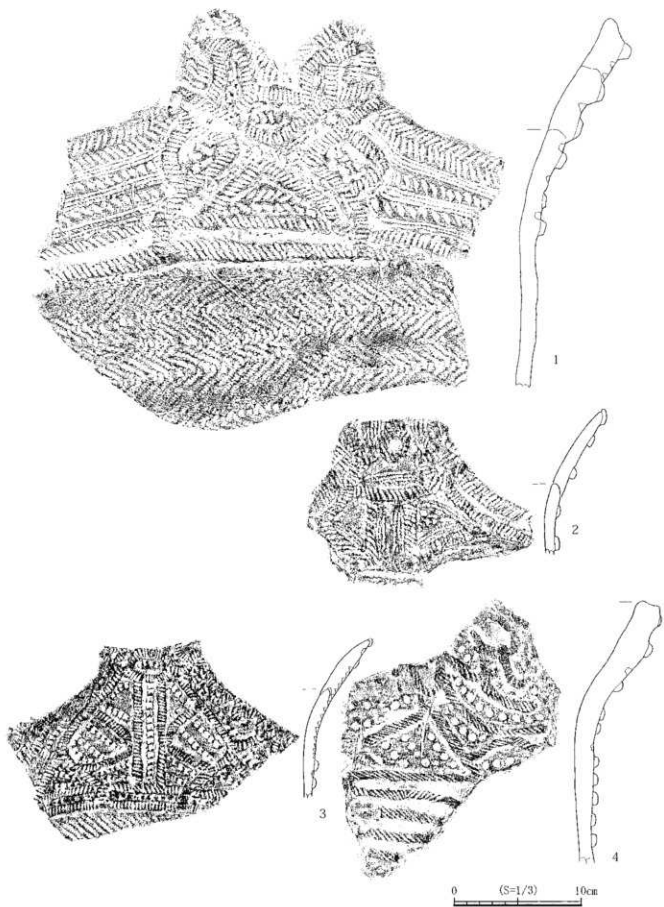
144図 縄文土器 (138)



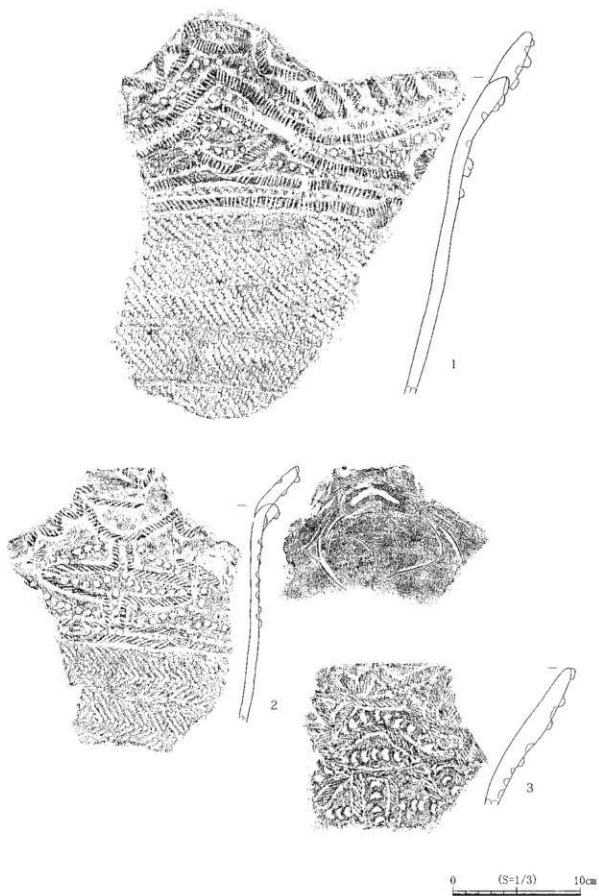
145圖 縄文土器 (139)



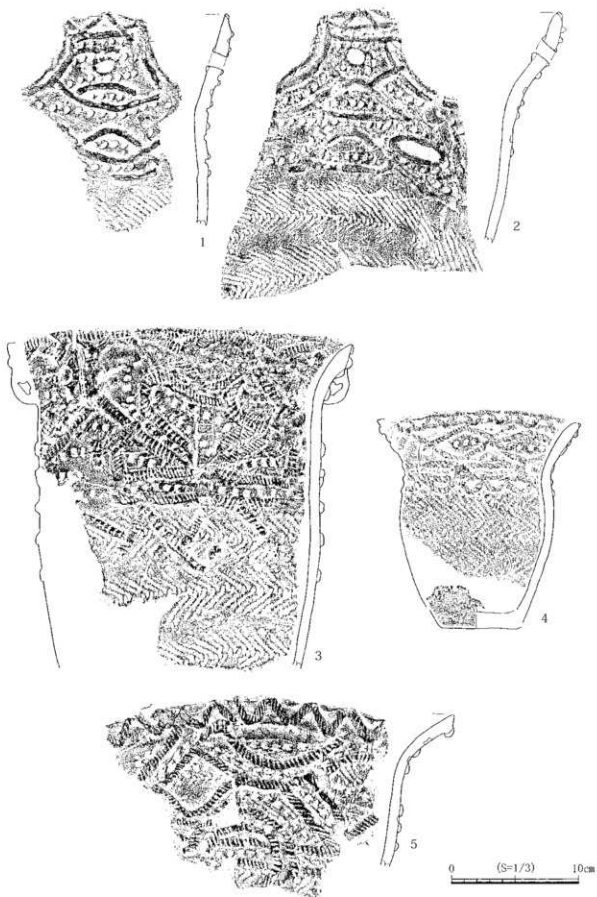
146圖 縄文土器 (140)



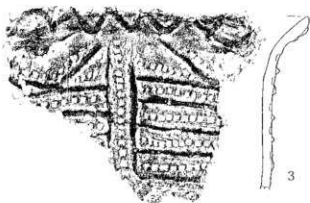
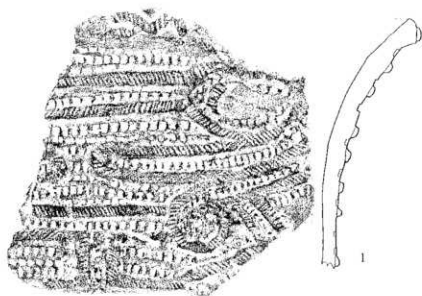
147図 縄文土器 (141)



148図 縄文土器 (142)

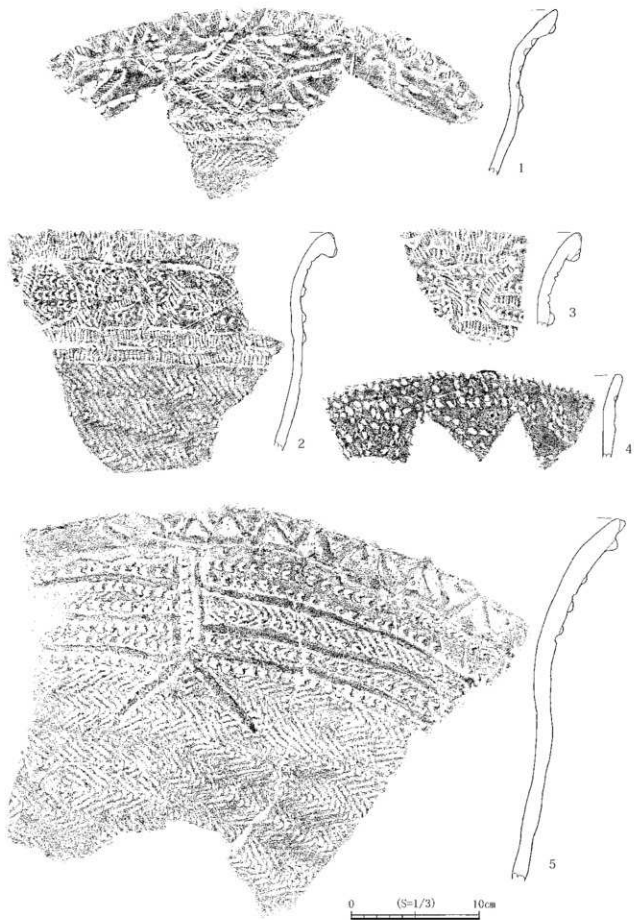


149圖 繩文土器 (143)



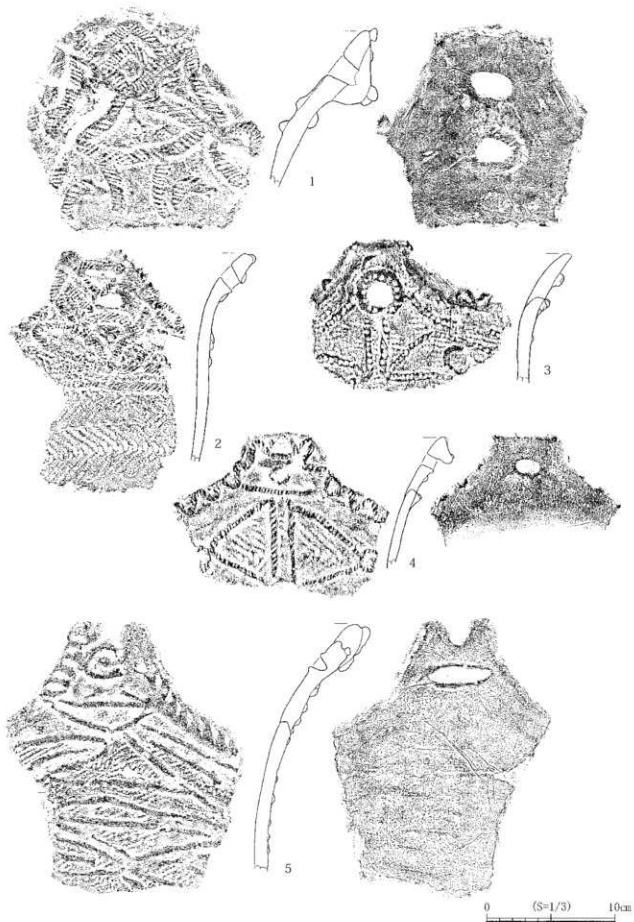
0 (S=1/3) 10cm

150圖 縄文土器 (144)

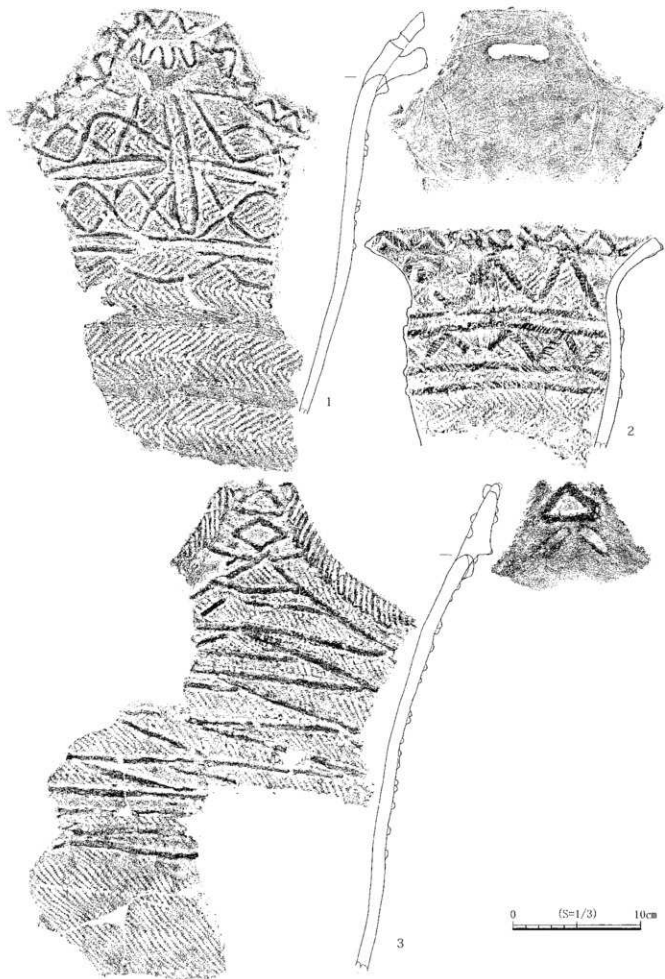


151圖 繩文土器 (145)





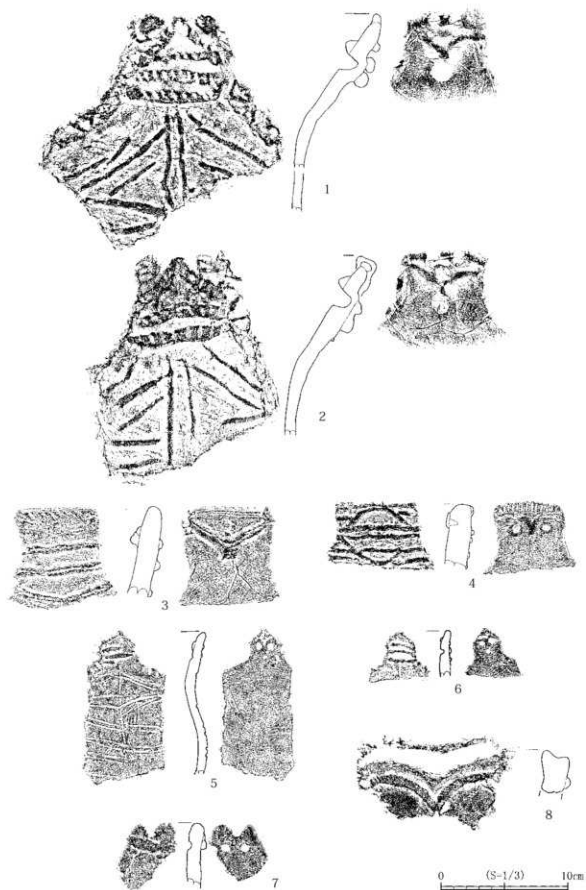
152図 縄文土器 (146)



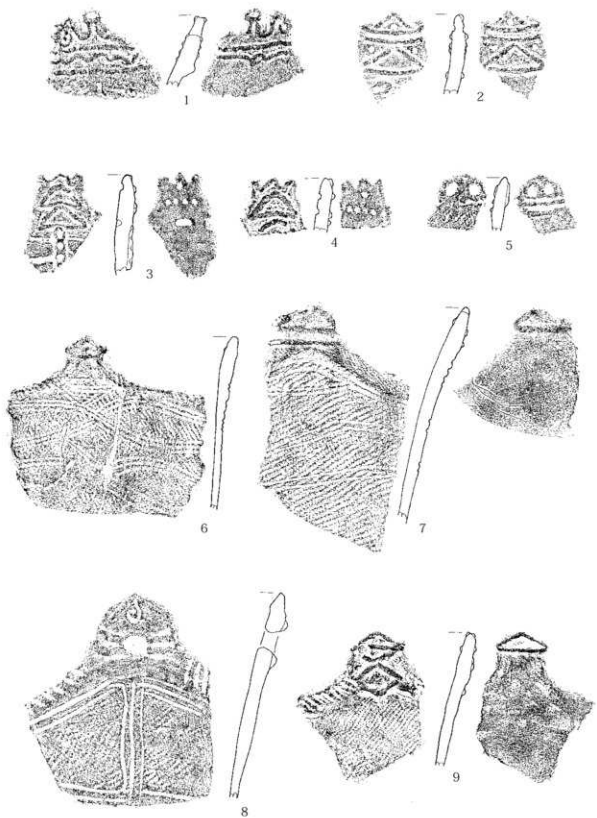
153圖 縄文土器 (147)



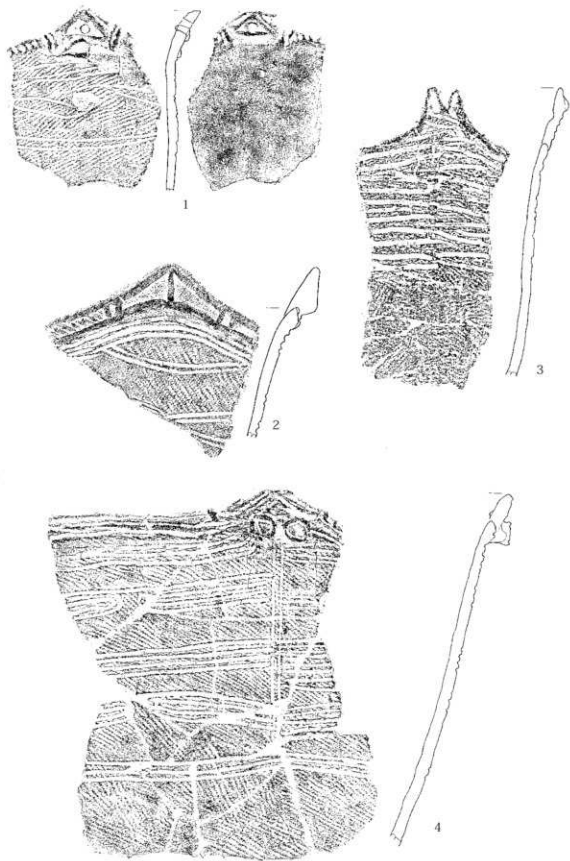
154図 縄文土器 (148)



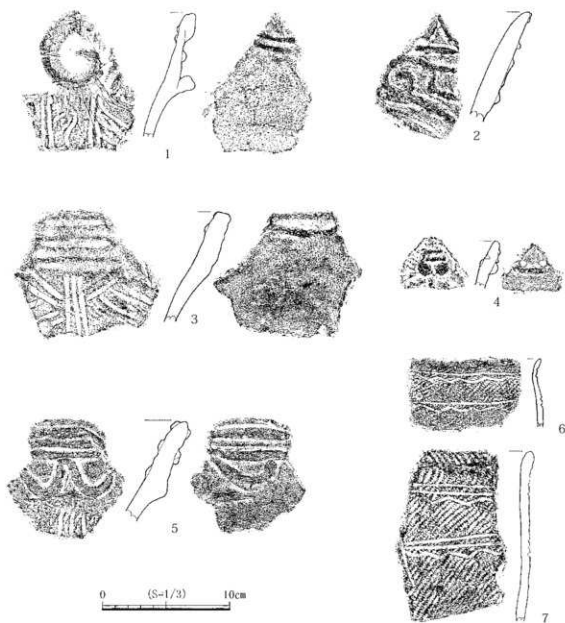
155圖 縄文土器 (149)



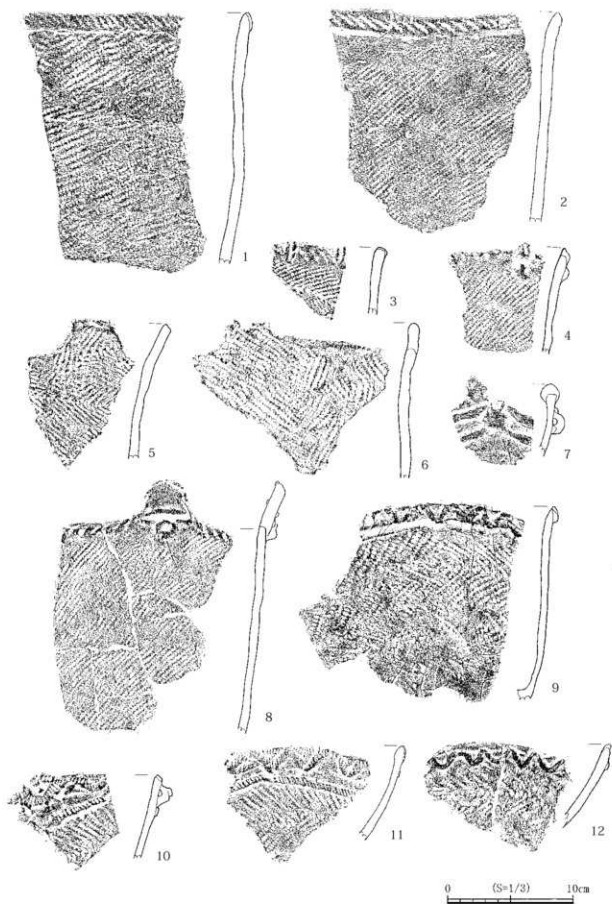
156圖 縄文土器 (150)



157圖 縄文土器 (151)

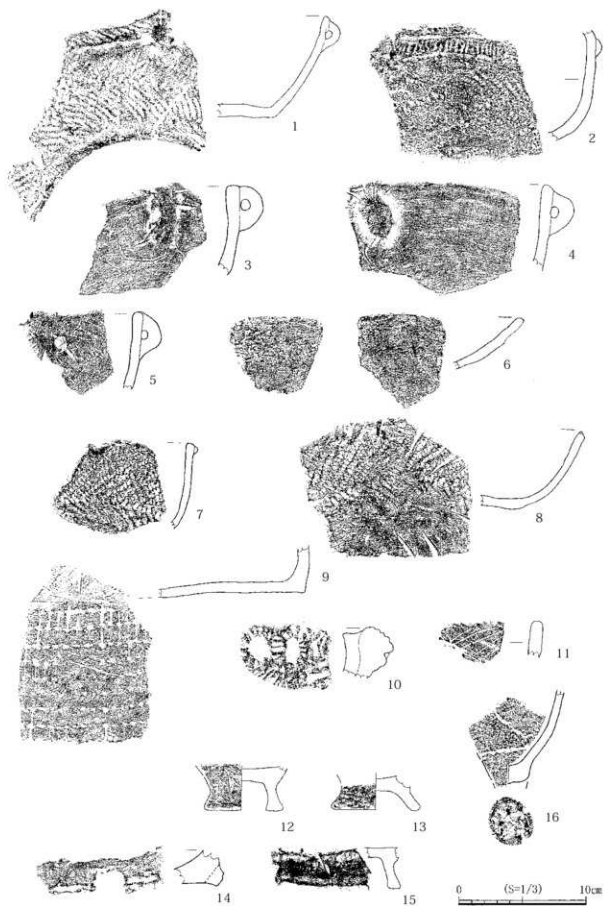


158図 縄文土器 (152)

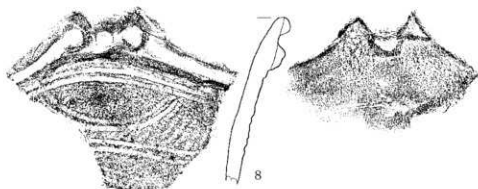
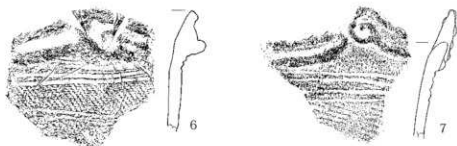
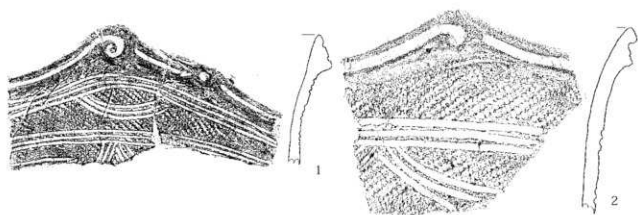


159図 縄文土器 (153)



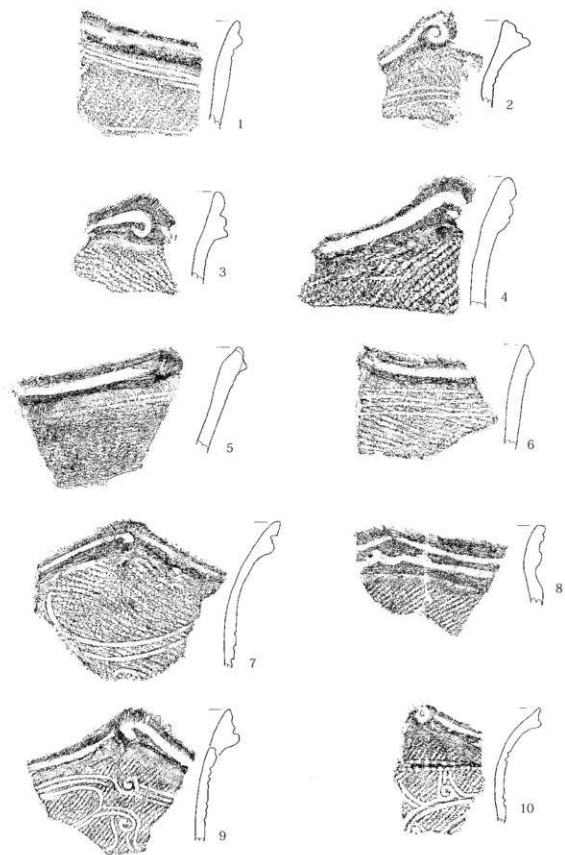


160圖 縄文土器 (154)



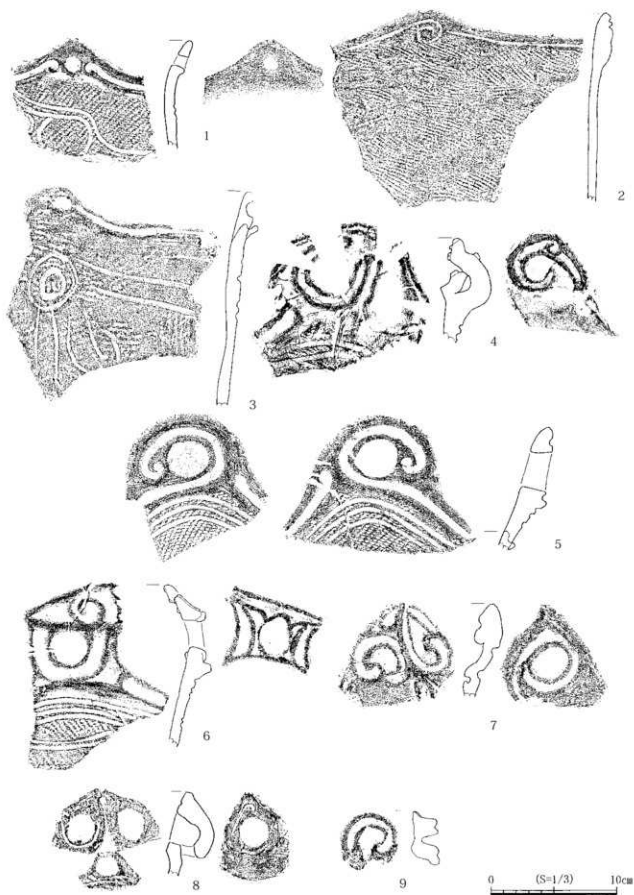
0 (S=1/3) 10cm

161圖 縄文土器 (155)

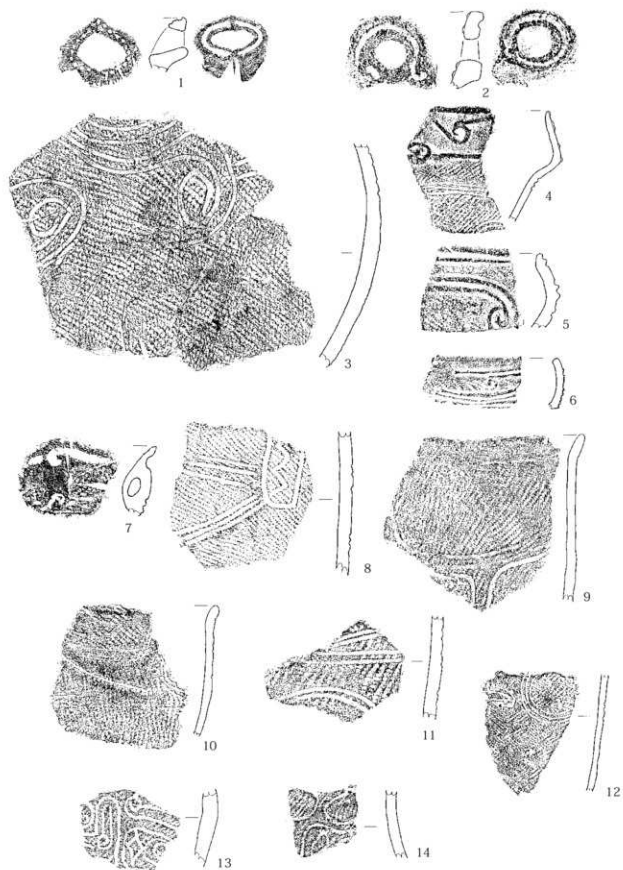


0 (S-1/3) 10cm

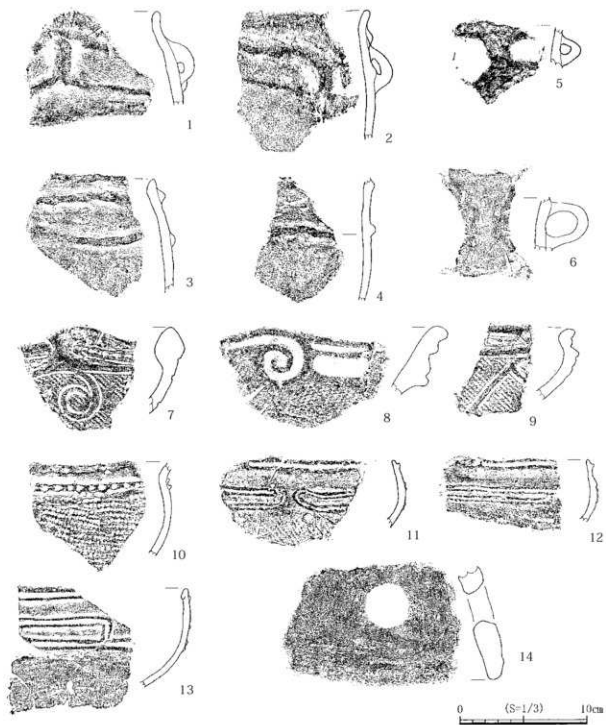
162図 縄文土器 (156)



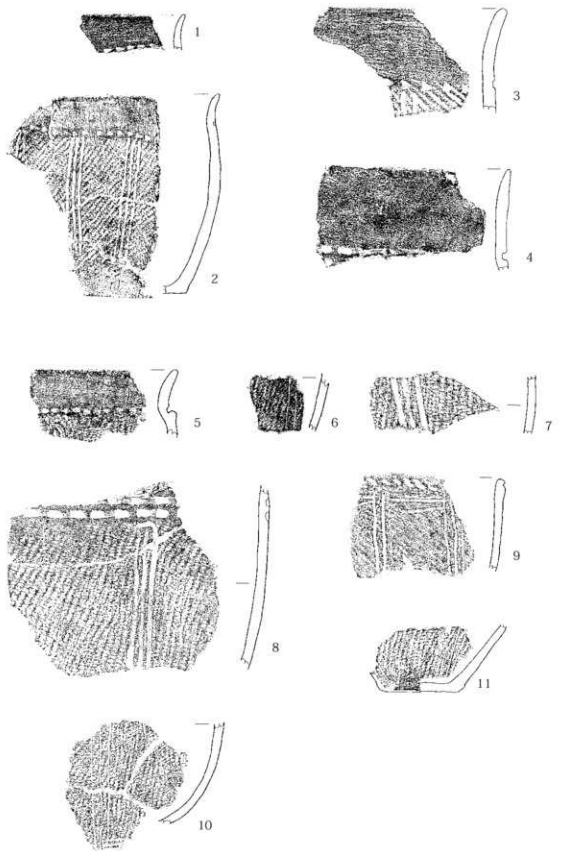
163圖 繩文土器 (157)



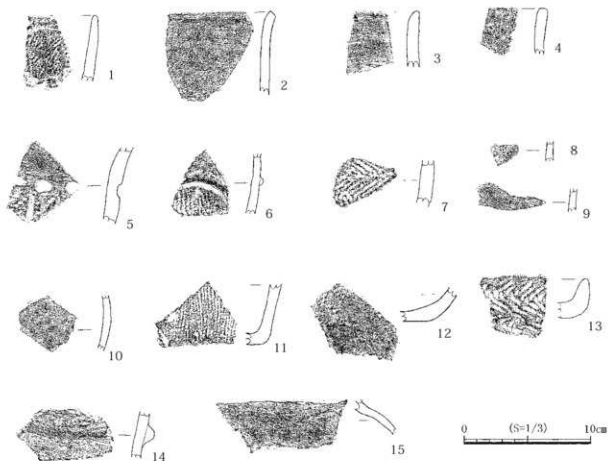
164圖 繩文土器 (158)



165図 縄文土器 (159)



166圖 縄文土器 (160)



167図 縄文土器 (161)

は胴部に8条の横位の押し引き刺突列が巡る。各列を一気に1周連続施文するわけではなく、土器を回転させながら、各面の8条の押し引きを少しずつ続けている。

横位に連続する弧状あるいは菱形を呈する貼付 (98図-3・5・6、99図-3、100図-3・4、149図-4・5、151図-1) は、次段階の円筒上層d式期に盛行するモチーフであり、新相を示すのであろう。

### 第III群4類 円筒上層d式 (102図-1～119図-3、152図-1～156図-2、156図-5)

粘土紐の貼付けと縄文で文様が施されるものをここに分類した。多くは弧状文や菱形文の連続あるいは所謂胸骨文が施される。粘土紐上に刻みや刺突が施されるもの (102図-4、104図-2、110図-2、152図-3) や回転縄文や押圧縄文が施されるもの (102図-1～3、103図-1、104図-1、105図-4・5、152図-1・2・4、153図-2) があるが、無文のものが多い。

前段階より見られる、口径に比して高さが低い器形や底径が小さいものもある。突起下に縦方向の粘土紐が付されるものが多いが、それらが欠落するもの (111図-1～112図-1、152図-5、153図-3、154図-1・5) も増加する。突起下に垂下する粘土紐隆帯と地文のみで装飾されたもの (118図-2・5・6) はこの段階か次段階のものの可能性が高い。

突起下に人体様の粘土紐貼付がなされるものもある (119図-2)。

また土器突起内面に、土偶の顔面に似た人面様表現がなされるものは、隆線手法によるものが多いことから、この段階のものと考えられ (155図-1～6)、同様の施文も見られる (155図-7～156図-2)。



第Ⅲ群5類 円筒上層e式(119図-4～122図-2、156図3・4、156図-6～158図-7)

主に沈線文で文様が施されものをここに分類した。比較的小型の土器が多い。文様は、突起下から伸びる縦方向の沈線文を中心に、横方向に弧状文や横走沈線が連続するものが主体であり、器形も胴部中位が張り出すものが多い。鋸歯状沈線文が見られるものもある(158図-6・7)。

122図-2は、RLの側面圧痕でこの段階の文様モチーフを施したものである。第Ⅲ群6類としたものの中で沈線文を欠くものの中にも、当期のものが含まれている可能性が高い。

第Ⅲ群6類 円筒上層式で時期・型式を特定できないもの(123図-1～137図-15、159図-1～160図-16)

1. 口頭部付近に波状の粘土紐貼付けが横走するもの(123図-1～125図-1、125図-3～126図-4) 波状の粘土紐貼付け上に縄文原体が押圧されるもの(123図-1・3～125図-1、125図-3・4)と無文のものがある(125図-5～126図-4)。原体押圧がなされるものは概ね円筒上層b・c・d式に、無文のものは上層d式前後に伴う可能性がある。胴部には、単節斜縄文・羽状縄文が施されるものが多く、結節回転文も見られる。

2. 突起部あるいはその下に粘土紐隆帯や縄文原体押圧が施されるが、地文以外の装飾に乏しいもの(127図-1～130図-2)。

3. 口径よりも底径がやや大きい小型のもの(130図-3～5)

装飾は乏しいが、少ないながらも一定量の出土例があり、特定の機能を有する可能性がある。

130図-3は一つの突起の下に円形の粘土紐貼付けがなされている。

4. 口縁部に粘土貼付け・刻みが施されるもの(130図-7・8、131図-1)

共に平坦口縁で、130図-7は単節斜縄文、130図-8は無文、131図-1は羽状縄文が施される。

5. 口縁部に縄文原体押圧や回転縄文が施されるもの(131図-2～132図-8)

密に縄文原体押圧が施される131図-4～132図-2は円筒上層a～c式期の可能性がある。また二重口縁のものも見られ、胴部に羽状縄文や単節斜縄文が施されている。

6. 口縁部が無文となるもの(133図-1～3)

胴部は単節斜縄文や羽状縄文が施される。133図-2はLRの縦回転施文であり、中期後半のものの可能性がある。

7. 全面が地文のみあるいは無文となるもの(133図-4～134図-8)

縄文地文は単節斜縄文あるいは羽状縄文が施される。円筒下層式土器の可能性もある。

8. 皿・台付皿・台部(135図-1～137図-15)

時期不明の皿形土器、台付皿形土器をここにまとめた。口縁部に波状の粘土紐隆帯が付されるものが見られる(135図-2、136図-1～3)。胴部は羽状縄文が施されるものが多い。

中期後半(大木式系の土器)

第Ⅲ群8類 椀林式に位置づけられるもの(138図-1～139図-5、161図-1～165図-16)

胴部に円形あるいは渦巻状の沈線文・隆線文を有するもの(138図-1～5、162図-9～163図-1・3、164図-3～6、164図-11・12、165図-7)があげられる。138図-5は、縦方向のナデで縄

文地文を磨消しており、沈線手法で縦長の楕円文を描く最花式に連なる特徴と考えられる。

口縁部突起には凹線による渦巻状のモチーフが見られるものが多い(161図-1・2・6・7、162図-2~4、162図-7・9・10、165図-10)。装飾的な突起部のものもこの段階と考えられる(163図-4~164図-2)。

163図-6は、突起上面が足形を呈するものである。足指の表現は、あたかも馬高式に特徴的な鶏頭冠突起様に見える。

橋状把手を有する壺や無文の器台も出土しており、榎林式~大木10式期のものと考えられる(165図-1~6、165図-16)。

また沈線文手法による「人物」様の表現がなされた土器片(土器図版139図-5)は、Ⅲ a-5層から出土しており、土器の胎土・焼成・主文様沈線の特徴からこの段階と考えたが、同層からは上層e式土器の出土も多い。縄文施文後、幅3mm程の浅い主文様沈線が施され、その後に幅1mm程のやや深めの線で、比較的しっかりと描かれている。土器片の大きさは上下8cm×幅6cm、人物画の大きさは上下4cm×幅3cm程度である。

頭部に長いものを装着し、片手に何かを持ち、靴様のものを履いて、足を広げた状態の人物が描かれたものと考えられる。

### 第Ⅲ群9類 最花式に位置づけられるもの(166図-1~11)

口頭部に無文帯を有し、その下に刺突列と縦方向に展開する沈線文が描かれるものが特徴的である(166図-1~5・8)。縦方向の沈線文が見られるものもここに含めた(166図-6・7・9~11)。

### 赤色顔料が明瞭に残る土器群(140図-1・167図-1~15)

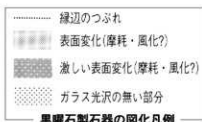
土器の内外面に赤色顔料が明瞭に残るものである。ほとんどのものが中期後半のものと考えられるが、167図-11は円筒下層式と考えられる。

(永嶋 豊)

## (2) 石器 (168 図～271 図)

北盛土からは 14,703 点の石器が出土した (第Ⅲ層から出土したもののみ、第Ⅰ～Ⅱ層は除外)。そのうち本報告では第Ⅲ層から出土した剥片石器 1544 点、礫石器 263 点を掲載した。石器の器種としては石鏃・石槍・石匙・石筥・不定形石器・異形石器・石核類・ビエスエスキュー・磨製石斧・敲磨器類・半円状扁平打製石器・抉入扁平磨製石器・石冠類・石錘・砥石・石皿・台石・石棒類・角柱類・擦切り具がある。

168 図～174 図には石器のグリッド単位の出土状況図および出土量比等を示した。そのなかで、第Ⅲ a 層の細分層で取り上げた石器の分布状況を見ると、第Ⅲ a-10 層から徐々に北側に範囲を広げながら石器が廃棄されている状況が読み取れる (おそらく土器なども同様の状況であると思われる)。なお、今回は資料の提示を最優先したため、細かな属性の分析などについては次回以降の報告で触れることとしたい。また、文中に記した石器の石質については掲載したのものみに言及したものであり、掲載しなかったものを含めた石質についてはこれも次回の報告でまとめることとする。



A類 石鏃 (a 有茎T基 b 有茎Y基 c 尖基 d 平基 e 円基 f 凹基 g 破損品) (175 図-1～186 図)

3,187 点出土し、541 点図示した。掲載外のものを含めた各分類の出土量は表 1 のとおりで、有茎石鏃が 7 割以上の圧倒的多数を占めている。

有茎石鏃の細分は、茎部から刃部の間に位置する肩部が片側だけでも水平になっているものを有茎 T 基、水平ではないもので肩部を持つものを有茎 Y 基、肩部が明瞭ではないものは尖基とした。有茎石鏃の先端部には数種類の正面形状が見られる。a を例にしてみると、175 図は先端部付近がやや強く尖るもの、176 図 32～177 図は側縁がややふくらみを持つもの、178 図 14～38 は側縁が直線状で正面形状が 2 等辺三角形になるものがみられる。有茎石鏃は基部にアスファルトが付着しているものが目立って見られる。アスファルト以外のものでは、180 図-41 の表裏面には赤色顔料が付着している。有茎石鏃はそのほとんどが第Ⅲ a 層から出土しており、円筒上層式以降の土器に伴うと考えられる。

尖基石鏃は丁寧な押圧剥離により器体が薄く作られるものと、器体が厚く、ごろっとした感じのものがある。前者は円筒下層式の土坑墓から副葬品として多量に出土する例が知られている。アスファルトは後者には付着例が見られるが、前者にはない。

平基石鏃は凹基との区別がつきにくい。全体的に尖基の薄型と剥離の状況が似ている。第Ⅲ b 層から出土する割合が高く、これも円筒下層式に伴うものと考えられる。

円基石鏃は尖基と平基との区別がつきにくいものがある。円基も平基同様第Ⅲ b 層から出土する割合が多いため、円筒下層式に伴うものと考えられる。

凹基石鏃は基部の抉り部が浅く、平基の基部両端が突起状に飛び出すものも含めている。抉りの浅いものは平基と類似しており出土層位も第Ⅲ b 層が大半であるため、これも円筒下層式に伴うものと考えられる。186 図-37・38 もこの種類に属する。抉りの深いものには抉り部と抉られてきた脚

部の形状に数種類が見られる。いずれも第Ⅲ a層からの出土が大半であり、円筒上層式以降に伴うものと考えられる。

これら石織に使用された石材の石質は珪質頁岩が多数を占める。そのほかには玉髄・黒曜石・鉄石英・凝灰岩などが用いられている。

#### B類 石槍 (a 無茎 b 有茎) (187 図～191 図)

237 点出土し、88 点図示した。石織同様、端部を鋭利に加工し、刺突等の機能が想定されるものであるため、分類の際は大きさ 40mm より大きいものを目安にした。だが基準値に近いものは既報告にあるよう厚さと重量も考慮し決定した。また、整形加工の状態により、石織と同じ整形加工が施されるものは 40mm より大きくても石織に含めている。

a には木葉・柳葉形を呈するものと基部側が直線状に整えられるものがある。また、先端部の加工が甘く、未完成の可能性があるものも多数存在する (189 図)。

b には石織の有茎 Y 基に類似した形態を呈するものと、有茎 T 基に類するものが存在する。

石槍の出土層位は大半が第Ⅲ a層からで、無茎の一部が円筒下層式に伴い、残りの大半が円筒上層式以降に伴う可能性が高い。石質は珪質頁岩を中心に、玉髄質珪質頁岩と鉄石英・黒曜石などがみられる。黒曜石製の石槍には剥離の稜線に擦痕が観察されるものが多い。

#### C類 石匙 (a 縦型 b 横型 c 斜型 d 両面加工で石槍状の先端を有するもの e 両面加工で石鏃状の先端を有するもの f 四角形の短辺部分に袢りを有し長辺部分を刃部とするもの g 細部加工がほとんど加えられないもの) (192 図～202 図)

1911 点出土し、177 点図示した。分類ごとの出土量は表 2 に示した。a 縦型が 5 割弱と多数を占める。縦長及び横長の剥片を素材にしており、素材剥片の形状により掴み部の作出位置に違いが出るようである。d は槍状に加工されたもので、掴み部の袢りが左右 1 箇所普通のタイプと、袢りが左右 2 箇所～3 箇所見られるものがある。後者は異形石槍と呼ばれることもあり、青森市石江遺跡や新町野遺跡では土坑墓から出土した例が見られる。f は袢り入りの削器とも呼ばれる。青森市上野尻遺跡では円筒下層 c 式に伴い出土したものに A タイプの使用痕光沢が確認された例がある。g は刃部の加工があまり顕著でないものである。この種類は第Ⅲ a層からの出土が他の種類に比べて目立つ。

石匙の石質は珪質頁岩を中心に、黒曜石・鉄石英などが僅かに含まれる。縦型の石匙には裏面に使用痕光沢が見られるものが多い。光沢の種類は詳しく調査していないが、高橋哲 (2011) によると三内丸山遺跡第 6 鉄塔地区出土の石匙の場合、A タイプの光沢が 5 割以上を占めている。北盛土でも同様の可能性がある。また、出土地点と層位にも特徴があり、出土石匙全 1911 点のうち、1238 点が第Ⅲ b層から出土し、そのうち 883 点が北の谷との重なり部分付近から出土している。この部分からは円筒下層 b 式土器が多量に出土しており、これらの石匙は縄文時代前期に帰属する可能性が高い。

#### D類 石鏃 (a 棒状 b 掴みがあるもの c 先端のみ作出したもの d 石織転用品) (203 図～205 図)

375 点出土し、92 点図示した。d の石織の転用品が最も多い。転用石鏃の素材石織には、有茎織が多く用いられている。その場合の先端部は、回転使用により磨耗している場合が多く、また、磨耗ま

でいたらないものの、先端部に不規則・微細な剥離により丸みを帯びているものもある。a、bについては幅4～8mm、長さ1～3cm程度の真っ直ぐな錐部を作出している。

石錐の石質は珩質頁岩が中心で、玉髓質珩質頁岩・黒曜石が僅かに含まれる。

#### E類 石錐（a短冊形 b撥形）（206図～210図-9）

248点出土し、64点図示した。今回報告したものはすべてaに属する。正面形状は206図～207図-2が基部から刃部にかけてやや広がる形状で、207図-3～(34)図までは楕円形・短冊形となる。これらについては、おもに刃部表裏面からの二次加工により正面円形もしくは直線状の刃部を作出している。刃部側面観は両刃のものが多い。209図～210図-3は刃部に片面側からの二次加工のみが見られ、片刃の刃部を作出している。210図4～9は刃部に二次加工が施されず、素材剥片の縁辺を残しているものである。側縁の整形加工については、後ろ2種でやや粗く規模の大きな剥離が見られ、最初の1種については、石槍の側縁加工と類似したやや整った整形剥離が見られる。使用石材は大半が珩質頁岩である。

#### F類 ビエス・エスキーユ（両極剥片含む）（210図10～38）

120点出土し、29点図示した。両極打撃により剥離された剥片及び残核と楔形石器をまとめた。このうち楔形石器と積極的にいえるものは38のみであり、残りの多くは黒曜石製の剥片類である。

#### G類 不定形石器（aスクレイパー類 b二次加工ある剥片 c使用痕ある剥片 d石鏃などの未成品類）（211図～224図）

1893点出土し、145点図示した。その内いわゆるスクレイパー類は86点、R、フレイクが16点、U、フレイクが43点、石鏃・石槍・石筥などの未成品と考えられるものが119点となっている。

aのスクレイパー類では、素材の側縁から末端にかけて比較的急角度の連続的な細部調整を加え、弧状の刃部を作出する、いわゆる搔器に分類されるものと、素材側縁などに連続的な二次加工を加えて直線・弧状などの刃部を作出する、いわゆる削器に分類されるものがある。bには二次加工があるもののaほど規則的な剥離が見られないものが含まれている。また、石鏃や石槍・石筥などの未成品は、従来この類に含まれていたが、今回はdとして独立させた。cは剥片の一部に切削などに伴うと思われる不規則・微細な剥離が見られるものである。

##### a スクレイパー類

211～215図-15は削器で75点図示した。多くは縦長剥片の1ないし複数の側縁に連続的な加工を施しいるものである。刃部の形状により、直線または弧状に凹む刃部を持つものや、弧状に突出する刃部を持つもの、小さく抉りを入れた刃部を持つものなどが見られる。

215図16～216図-7は搔器で11点図示した。搔器・削器ともに第Ⅲb層からの出土が目立つ。石質は珩質頁岩が大半を占める。

##### b 二次加工のある剥片

16点図示した。不定形な剥片の一部に不規則な剥離が見られるものである。石質は珩質頁岩が多い。c 使用痕のある剥片 217図-5～219図

各種形状の剥片の一部に使用に伴う微細な剥離が見られるものである。第Ⅲ a 層からの出土が目立つ。石質は珪質頁岩が大半であり、黒曜石もわずかに見られる。

#### d 石鏃・石槍・石筈などの未成品類 (220 図～224 図)

両面加工の不定形な石器をまとめ、加工の度合いなどで石鏃・石槍・石筈の未成品に分類した。未成品というよりは失敗品や製作過程を示す資料を多く含む。数量が多いのは石鏃の未成品としたもので、71 点を図示した。石鏃未成品と考えられるものの形状は左右対称の木葉形のもの (220 図 1～17) と左右非対称の半月形に近いもの (220 図-18～221 図-6) などがある。これらの先端部はどがつておらず、丸みを帯びるものが多い。器体表裏面には押圧剥離による加工が施されているが、完成品より剥離がやや粗く、作りこまれていない印象を受ける。そのほか、完成品間近のものも存在する 221 図-20～39)。ただし、この段階からどの完成品へつながるかは今後の検討を要する。

#### R 類 異形石器 (225 図～228 図)

135 点出土し、104 点図示した。摘みを持ち、刺又状や衣類ハンガーのような体部形状のもの、ブーメラン状の体部に複数の突起がつくものや突起がつかないものなどの様々な形態があるが、基本的に左右対称の形状を意識していると思われる。石鏃や石錐の二次加工に用いられるような細かく器体全体を覆うような押圧剥離で素材剥片を目的の形状に仕上げられており、素材には剥片以外に石鏃や石匙の破損品なども利用される。228 図-8～23 にはやや大きめの剥片を利用し、素材縁辺に小規模で連続的な二次加工を施して器体を整形しているものである。これらもほぼ左右対称のもので、8～12・20・21 は石匙を再利用したものである。すべての個体というわけではないが、剥離の線縁付近に擦痕が観察できるものが相当数ある。擦痕の状態は黒曜石製の大型石槍表面などに見られるものと類似する。異形石器は第Ⅲ a 層から多く出土している。石質は珪質頁岩・鉄石英・黒曜石などが見られる。

#### P 類 石核・原石・剥片・破片 (a 石核 b 原石 c 剥片石器製作時の剥片・破片) (229 図～234 図)

石核 182 点・剥片類 2879 点が出土し、105 点を図示した。本遺跡から出土する石核には石匙や削器などの素材となるような縦長剥片を剥離した残核はほとんど見られず、不定形・小型・寸詰まりの剥片を剥離した不定形な残核が多い。剥離の特徴としては、自然面・剥離面などを打面とし、剥片を剥離できそうなところへ頻繁に打面を転移している点が挙げられる。また、表裏両面の縁辺から求心的な剥離を行っている例が見られるが、目的剥片を剥離した残核かどうか疑問が残る。石材は珪質頁岩が多く、黒曜石製も存在するが、これについては小型のものが多い。

#### H 類 石斧 (a 磨製石斧) (235 図～239 図)

308 点出土し、67 点を図示した。完形品の出土は少ない。刃部が残っているもの、基部のみのもの、他器種に転用されているものに分けて掲載した。

刃部が残るものについては、刃部の側面観が両刃のもので体部断面形が長方形ないし隅丸長方形のもので断面形が楕円形のものがある。前 2 者について、刃部の正面形は両端部が丸みを帯びた直線状のものと、片方の端部が片減りした円形の形状が見られる。これらは器体の厚さにおいて 2 cm 前後の

薄いものと2cm以上3cm未満のやや厚いものがある。また、緑色片岩や青色片岩などの北海道系の石材が良く用いられ、擦り切り技法の痕跡が見られるものもある。後2者は刃部正面形が丸く、片減りしている例が少ない。器体表面は丁寧に研磨されているが、たまたに成形時の敲打痕や剥離痕が残る場合がある。石材には花崗閃緑岩が多く用いられる。器体の厚さは2cm以下のものもあるが、3cmを越えるものが目立つ。擦り切り技法を使用したものは見当たらない。236 図10～18は丸鑿状の刃部を持つ。器体の厚さは1cm前後と薄いものが多い。石質は緑色片岩などの北海道系の石材が多用されている。

238 図-7は石斧の基部を再加工しようとした擦り切り痕跡が見えるものである、通常長軸方向に擦り切り痕跡が残ることが多いが、この資料は長軸に直行した擦り切り痕跡が見られる。

239 図は他器種への転用品である。転用後の機種は敲磨器I b類が大半である。1～6は刃部に敲打痕が見られるもので、7～11は体部の折損面に敲打痕が見られる。12は折損した石斧の前面に敲打痕が見られるものである。13は石錘に転用された例である。

#### I類 敲磨器類 (a 主に凹のあるもの b 主に敲打痕のあるもの c 主に磨痕のあるもの)

(240 図～246 図)

円形・長楕円形・不整楕円形・棒状楕円の礫を素材とし、正面や側面に敲打や磨りによる使用痕跡が観察されるものである。

これらの敲磨器類の使用痕は、1個体に1種類の痕跡が見られる場合もあるが、a～cの痕跡が複合して1個体に観察される場合が多い。

##### a (240 図～243 図-4)

388 点出土し、37 点図示した。敲打による器表面の荒れもしくは明確な凹みが見られるものを本分類に含めた。敲打部分の状態には次の4つが見られた。器表面に敲打による荒れが見られるもの。器表面に敲打による明確な凹みが見られるもの。明確な凹みに細い擦痕状の傷が伴うもの。凹み内面が回転研磨などにより滑らかなもの。以上の属性は観察票に記載している。敲打の見られる位置は次のとおりであった。敲打が器体の片面中央寄りに見られるもの(240 図-1～5)、敲打が器体表裏両面に見られるもの(240 図-6～241 図-1～5・8～10)、敲打が表裏両面だけでなく側面にも見られるもの(241 図-6・7、242 図・243 図-1～4)がある。使用石材の石質には安山岩が多い。

##### b (243 図-5～7、244 図～247 図-1・2)

217 点出土し、31 点図示した。器体側面などに敲打による器表面の荒れが見られるものを本分類に含めた。敲打痕跡の見られる位置などにより次のようなものが見られた。

器体の長軸端部に敲打痕が見られるもの(243 図-5～244 図-8)。

器体側面に敲打痕跡が見られるもの(245 図)。側面の端部寄り、中央寄り、側面全体に広がる、などの状態が見られる。

器体の長軸端部や側面に範囲の広い敲打痕が見られるもの(246 図)。敲打痕は平坦面の集合であり、境界部分に稜線が見られる。いわゆる多面体の敲き石と呼称されるものである。敲打痕は扁平な礫の端部だけに見られるものと、円または直角礫の周囲及び全面に見られるものがある。前者

には安山岩・デイサイトなどがよく用いられ、後者には頁岩が用いられることが多い。

器体の剥離などでできた稜線上に敲打痕が見られるもの(247図-1~2)。珪質頁岩などが用いられている。

c (247図-3~250図-3)

392点出土し、23点図示した。器体側面に敲打や磨りによる直線的で幅広・平坦な機能部(使用痕跡)が見られるものである。加工の状況などに着目したところ以下のようなものが見られた。

機能部の対辺に整形に伴う剥離が見られるもの(247図-3~7)。

J類の半円状扁平打製石器と形状や加工状況において類似点が多い。ただし、機能部の幅がJ類より広く連続する点と、素材の厚さが厚い点などで違いが見られる。(8)図-7はK類を再利用しているものである。器体真ん中あたりで折損しているものが多く、機能部側の折損面には磨耗が見られるものがある(247図-5・7)。

機能部の対辺に整形に伴う剥離が見られず、機能部に剥離を伴うもの(247図-8~248図-5)。

対辺には剥離は見られないものの、敲打痕が見られる。また、長軸端部には剥離や挟りが見られる。この部分はJ・K類などで想定されているのと同様、器体保持の際に紐をかけるために作出された可能性がある。また、器体表裏面には敲打による凹みや器面の荒れが見られる場合がある。

機能部周囲に整形に伴う剥離を伴わないもの(248図6~250図-3)。

扁平な楕円礫を用いることが多く、側面に見られる機能部は幅広く連続するものと、やや幅が狭く断続的に続くものがある。

cに使用される石材の石質には安山岩・デイサイト・流紋岩などがある。

#### J類 半円状扁平打製石器 (250図-4~252図-4)

235点出土し、16点図示した。半円状扁平打製石器は、「扁平で板状を呈する礫を素材とし、側縁から求心的に連続的な調整を加え、素材の側縁に直線的な刃部を作出する」もの(青森県教育委員会 2004)と捉えた。第Ⅲb層からの出土が多く、従来円筒下層式土器に使う特徴的な石器とされている。整形加工の状態により、次のとおり細分した。a. 整形加工に剥離のみが見られるもの。b. 整形加工に剥離と研磨が併用されるもの。aは従来の半円状扁平打製石器であり、bはK類との中間に位置するものと捉えられる。

機能部は断面が鋭角で直線状に続くものと平坦部が断続的に続くものがある。厚さは1.5~2cm程度のものが多い。機能部側の側縁形状には緩やかに湾曲して凹むもの、直線状のもの、緩やかに突出するものなどがある。長軸端部には挟りや敲打痕などが見られる場合があり、その部分から器体中央部に向かって帯状の光沢や変色範囲が見られるものもある。これらは器体保持の際に紐をかけた痕跡と考えられている。石材は安山岩が圧倒的に多く、他にデイサイト・玄武岩が見られる。

#### K類 挟入扁平磨製石器 (252図-5~254図-4)

211点出土し、11点図示した。板状の素材礫を剥離整形した後、全体に研磨を加え仕上げたもので、正面形状は扁平な三角形で、短辺に挟りが1箇所作出される。第Ⅲb層からの出土が多く、従来円筒下層式土器に伴う特徴的な石器とされている。真ん中付近で破損しているものが多いが、接合し全体



形状が分かるものも出土している。研磨が全体に及んでいるものが代表的であるが、整形剥離を研磨で消しきれていないものが相当数ある。挟り部は剥離整形段階で作出した後、最終的に研磨整形により仕上げられている。挟り部分から器体中央部にかけては帯状の光沢や変色範囲が見られるものもある。これらは器体保持の際に紐をかけた痕跡と考えられている。機能部には使用に伴う断続的な鈍い光沢や、小規模な剥離が観察される。石質は安山岩・緑色岩などが見られる。

#### 〇類 石冠類 (a 三角柱状もしくは斧状の突出部を持つ磨製石器 b 北海道式石冠とその類品)

##### a (258 図-6 ~ 259 図-1)

41 点出土し、14 点図示した。全面が研磨されているものが多い。三角柱状のものは 258 図 6 ~ 258 図 1 である。全体の形状は三角柱の一端がすばまっており、反対側の端面側面は 257 図-1・3 のように内側に凹むものがある。258 図-1 は白色の凝灰岩製で、側面に隆線を削り出した半円状の模様が見られる。半円状の頂点付近と器体頂部などには敲打による変形行為がなされている。烏帽子状の突起を持つものは 258 図-2・4・5 である。258 図-2 は烏帽子状の突起部と底面がやや張り出した台部からなる形状である。台部の側面には沈線状の凹みが見られる。258 図-4・5 は小型である。底面の長軸両端部に凹みが見られる。5 の台部側面には沈線が見られる。その他の形状のものは 258 図-3・259 図-1 などがある。258 図-1 は凝灰岩製で全体が研磨整形され、一見三角柱状に見える。しかし器体側面中央付近に削りだされた段差が見られ、底面から見ると男性器を模したように見える。259 図-1 は一見すると石冠に見えないが、側面を敲打して楕円形の突出部を作り出していることや、長軸端部が片側に向かってすばまっている点などが類似しているためこの類に含めた。今回は掲載しなかったが、自然石の中にも一見三角柱状石冠に見えるものが出土しており、石冠に類似するものや代用品的なものもあったと思われる。

##### b (254 図-5 ~ 256 図-5)

85 点出土し、11 点図示した。b はいわゆる北海道式石冠の類品とされるものが大半である。楕円形礫を素材に長軸中心線付近に敲打整形による浅溝が巡るものである。底面には幅広いすり面が見られ、その周囲には使用による剥離が見られるものが多い。頂部付近に帯状の敲打痕が見られるものがある。正面の形状には数種があり、256 図-1 は代表的な形状といえる。256 図-5 はそのミニチュア品である。正面形状の違いは主に頂部の形状や使用頻度によるが、正面形が台形状の 254 図-5 と 255 図-1 については、北海道で出土する当該石器に近似している。

a・b ともに出土層位は第Ⅲ a 層が大半を占め、細別層では第Ⅲ a-9・10 層の出土が無いため、帰属時期は円筒上層 c 式以降になると考えられる。石質は安山岩が多く、閃緑岩・粗粒玄武岩・デイサイトなども見られる。

#### V 類 擦切具 (259 図-2 ~ 9)

31 点出土し、8 点図示した。礫片の端部に凸状断面の使用痕跡(機能部)が見られる。J 類や K 類の機能部を転用したものと、礫剥片の端部を使用したものがある。機能部は直線状のものと内反りするものがある。機能部の厚さは 1 cm 弱である。石材は安山岩が多く、デイサイト・斑岩なども見られる。

#### N類 石錘 (260 図-1 ~ 261 図-2)

22 点出土し、10 点図示した。扁平あるいは楕円礫の端部に剥離や敲打により抉りを形成したものと(260 図-1 ~ 8)、連続した敲打により紐かけ溝を作出したものの2種類がある(261 図-1 ~ 2)。

#### S類 砥石 (261 図-3 ~ 263 図-2)

123 点出土し、19 点図示した。素材礫の表面に研磨による平坦面や溝が見られるものである。器体を手を持って対象に擦り付けたと考えられるもの(22 図-3 ~ 5)と、器体を地面等に設置し、対象を擦り付けたと考えられるもの(22 図-6 ~ (24 図-2)がある。前者は小ぶりなものが多く、後者は小ぶりなものと大きなものがある。後者は浅い皿状の研磨面の他、溝状の擦痕が見られるものもある。石材は凝灰岩や安山岩がみられる。

#### L類 石皿 (263 図-3 ~ 267 図-5)

234 点出土し、22 点図示した。完形品はほとんど無く、破損した状態での出土が多い。また、被熱痕跡を持つものも多い。主に機能部の状況などにより以下のように分類した。

1：中央部付近に使用による磨り面(明確に凹まない)が見られ、厚みのある扁平な礫を素材としている(263 図-3・4・264 図-1・265 図-2・4)。底面や側面を敲打で仕上げているものもある。

2：使用面が平坦で、縁辺部に敲打などにより縁が作出されたもの(266 図-3 ~ 267 図-5)。底面が敲打などにより平坦に仕上げられているものや、脚が作出されているもの(267 図-5)がある。平面形状は不明なものが多いが、267 図-5 のような隅丸方形もしくは片方の端部がやや狭くなるような形状が一般的と思われる。注目されるものとしては、縁の外側に石棒の先端部に見られるような同心円状の模様を敲打により作出した個体が2個体ある(267 図-3・4)。

3：中央部付近に使用によるすり鉢状の凹みが見られるもの(264 図-2 ~ 265 図-1・3・266 図-1)。厚みのある礫を素材としている。使用による凹みはすり鉢状でかなり薄くなるまで使用しているものや、桶状のものなどがみられる。

3種類とも第Ⅲ a 層からの出土が多く、おおむね円筒上層式以降の土器に伴うものと考えられる。細別層出土状況では第Ⅲ a-2・4・7・8 層がみられ、第Ⅲ a-9・10 層からは出土していないことから、円筒上層 c 式 ~ 複林式に伴っていることは確実である。石材は安山岩が大半を占める。

#### M類 石棒類 (268 図-1 ~ 270 図-12)

145 点出土し、27 点図示した。完形で出土したものは少なく、大半が破損状態での出土である。石材には安山岩が多く用いられている。以下のように分類した。

1、棒状の礫そのもので加工があまり見られないもの(268 図-1 ~ 7)。

被熱痕跡があるものも存在するが、積極的に石棒に分類するためには出土状況が明らかになる必要がある。

2、敲打・研磨加工されたもので、断面形状が角の取れた方形または長方形(268 図-8 ~ 12)。

268 図-8 ~ 10 は丁寧に研磨整形されており、10 の先端部には使用に伴う擦痕が見られる。こ

れらは石刀の可能性もある。268 図-11・12 の側面には研磨による溝状の凹みが見られる。

3、敲打・研磨整形されたもので、両端がややすぼむ円柱状の形状 269 図-1～270 図-5。

従来北東北の縄文時代中期に特徴的な石棒とされているものである。端部は平坦なもの・凹みや同心円文が見られるものなどがある。横断面形は円形で、一部分に平坦な部分が作られており、横にして置く際に安定するように加工されたと考えられる。

4、石刀に分類されるもの 270 図-6～12。

横断面円形の柄に横断面円形もしくは涙形の刃部がつくと考えられる。完形品はない。また、2 の一部もこの種類に含まれる可能性がある。

石棒・石刀双方ともに第Ⅲ a 層からの出土が多く、細別層では第Ⅲ a-4～8 層からの出土が多く、円筒上層 c 式～椀林式に伴う可能性が高い。

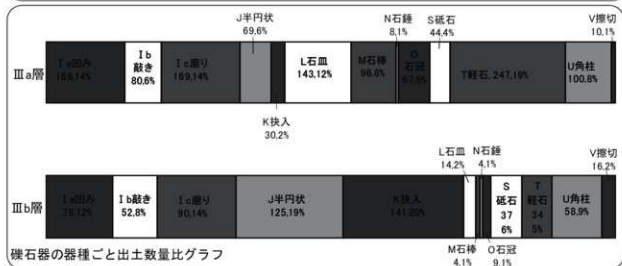
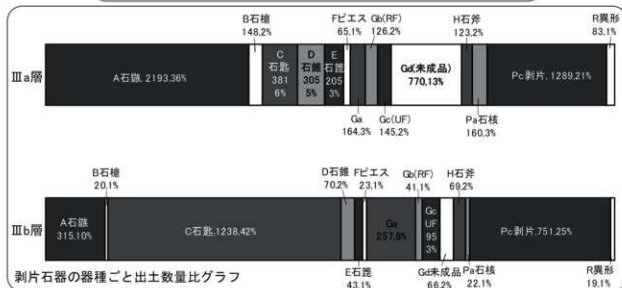
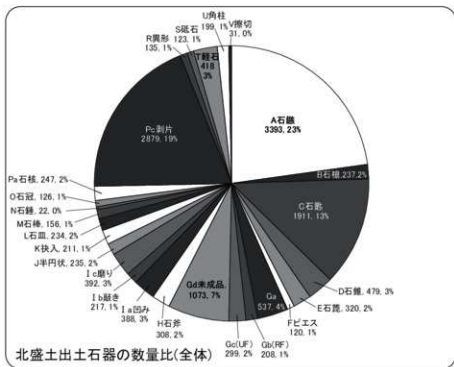
#### U 類 角柱類 (271 図)

流紋岩や安山岩・デイサイトの柱状節理の礫が 199 点出土しており、5 点図示した。太さ 3 cm ほどのものが多いが、7～10 cm と太いものも見られる。折損した資料が多く、被熱した痕跡が観察できるものもある。271 図-5 には擦痕が見られる。点に敲打痕や磨痕が見られる。

(茅野)

#### 【参考文献】

- 青森県 2002『青森県史 別編三内丸山遺跡』青森県史編さん考古部会（編）  
青森県教育委員会 1996『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 205 集  
青森県教育委員会 1997『三内丸山遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 230 集  
青森県教育委員会 1998『三内丸山遺跡ⅩⅠ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 251 集  
青森県教育委員会 2008『三内丸山遺跡 34』青森県埋蔵文化財調査報告書第 463 集  
青森県教育委員会 2009『三内丸山遺跡 35』青森県埋蔵文化財調査報告書第 478 集  
小笠原雅行 2008「円筒上層式土器」：344-351、小林達雄（編）『総覧縄文土器』刊行委員会  
茅野嘉雄 2008「円筒下層式土器」：218-225、小林達雄（編）『総覧縄文土器』刊行委員会  
高橋 哲 2011「円筒下層式土器期の石匙の使用痕研究」特別史跡三内丸山遺跡年報-14-  
青森県立郷土館 2001『青森県立郷土館収蔵資料図録-第 3 集・考古編 (2)-』



168図 北盛土出土石器の数量比

剥片石器の層位別・分類別出土点数表

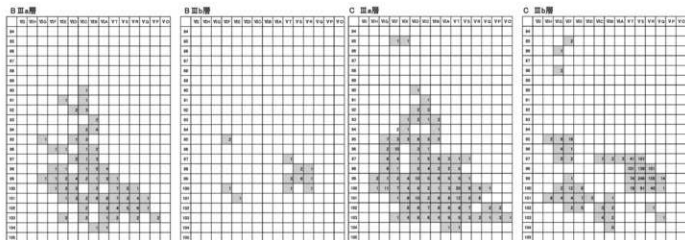
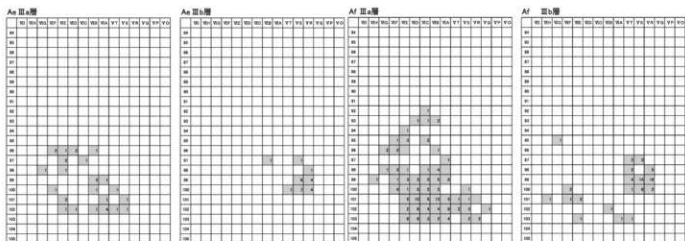
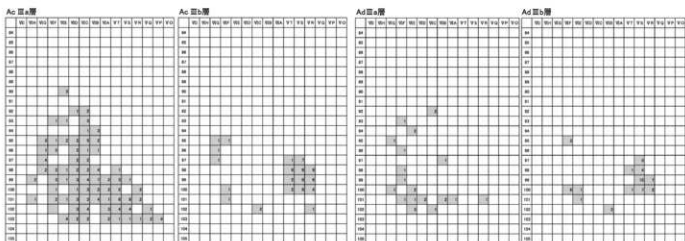
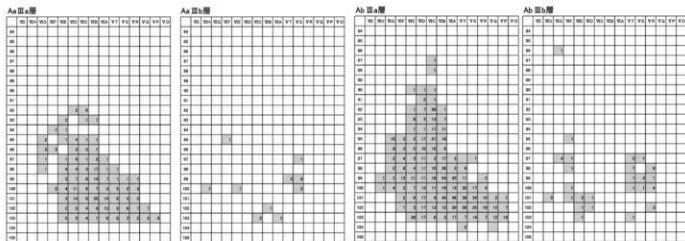
分類	A 石鏃	B 石棒	C 石釘	D 石鏃	E 石鏃	F c'2入	Ga 削・掻器	Gb 二次加工	Gc U削片	Gd 石鏃末	Gd 石鏃末	Gd 石鏃末	Pa 石鏃	Pc 削片	R 炭粉	H 石屑	総計
Ⅲ	880	69	291	104	72	32	116	41	59	136	88	13	65	830	33	116	2945
Ⅲa	1611	114	325	155	98	50	124	104	118	206	156	51	76	997	63	85	4333
Ⅲa-0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	7
Ⅲa-1	11	1	0	3	1	0	0	0	0	1	0	0	1	7	0	1	26
Ⅲa-2	34	4	4	4	2	0	3	2	2	4	3	0	0	31	0	4	97
Ⅲa-3	14	0	1	1	0	0	1	0	2	6	1	1	0	18	2	3	50
Ⅲa-4	45	4	4	0	5	4	2	1	4	7	5	1	2	24	1	1	110
Ⅲa-5	63	5	4	5	3	2	5	2	1	14	4	3	4	40	2	8	165
Ⅲa-6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲa-7	99	8	11	5	6	0	4	6	8	12	7	2	4	33	2	5	212
Ⅲa-8	161	2	14	12	8	8	16	3	3	18	8	4	3	63	9	7	339
Ⅲa-9	97	8	12	7	7	1	3	8	5	8	10	2	1	43	4	5	221
Ⅲa-10	56	2	6	8	3	0	6	0	2	7	2	2	4	30	0	4	132
Ⅲb	315	20	1238	70	43	23	257	41	95	43	11	12	22	751	19	69	3029
Ⅲd	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	10
Ⅲ・Ⅳ	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
総計	3393	237	1911	375	248	120	537	208	299	462	296	91	182	2879	135	308	11681

礫石器の層位別・分類別出土点数表

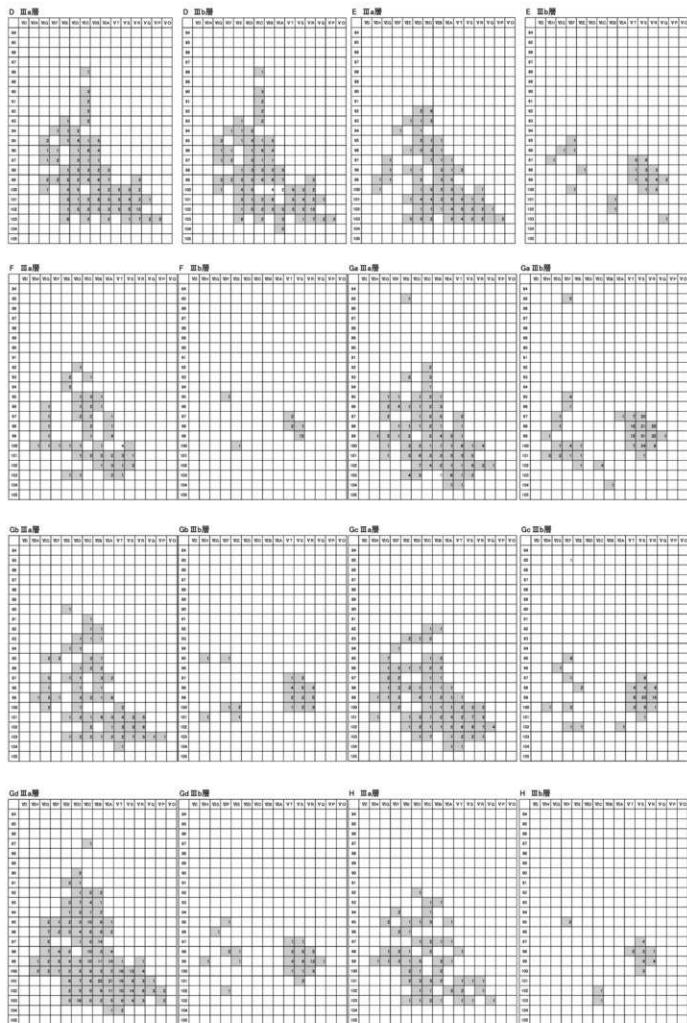
分類	Ia 凸刃	Ib 匙形	Ic すじ	J 半円状	K 狭入り	L 石鏃	M 石棒・石刀	N 石鏃	O 北海道式石鏃	Qu 石鏃	S 礫石	T 鞋石製品	U 角柱状	V 磨切り	総計
Ⅲ	141	85	133	41	40	77	56	10	18	32	42	137	41	5	858
Ⅲa	121	64	122	56	25	95	56	5	11	40	30	199	65	8	897
Ⅲa-0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲa-1	1	0	1	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0	0	7
Ⅲa-2	6	0	4	0	0	2	2	1	1	0	2	1	3	0	22
Ⅲa-3	1	0	4	2	1	0	0	0	0	1	1	1	2	1	14
Ⅲa-4	4	2	6	1	0	6	13	0	0	2	2	10	5	0	51
Ⅲa-5	14	7	14	2	0	12	7	0	2	2	3	4	0	0	67
Ⅲa-6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲa-7	13	1	7	1	1	14	7	0	0	3	2	12	8	0	69
Ⅲa-8	5	3	8	4	1	10	11	2	1	3	4	20	3	0	75
Ⅲa-9	4	1	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	5	1	16
Ⅲa-10	0	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	9	0	14
Ⅲb	78	52	90	125	141	14	4	4	7	2	37	34	58	16	662
Ⅲd	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅲ・Ⅳ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計	388	217	392	235	211	234	156	22	41	85	123	418	199	31	2752

169図 石器の層位・分類ごと出土点数



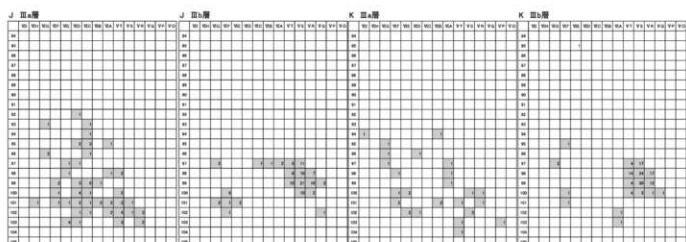
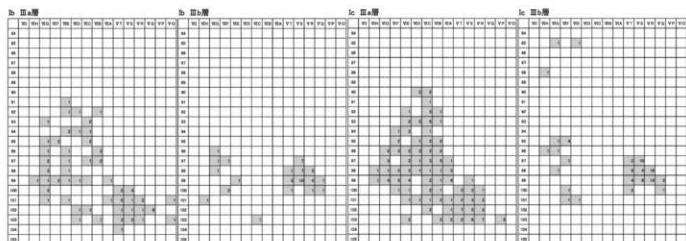
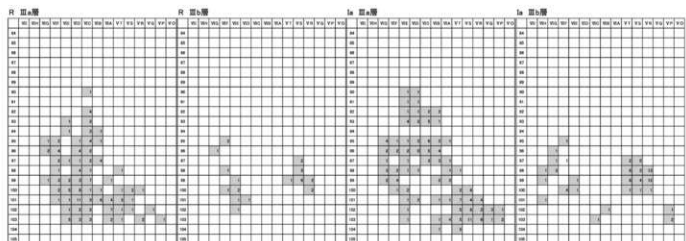
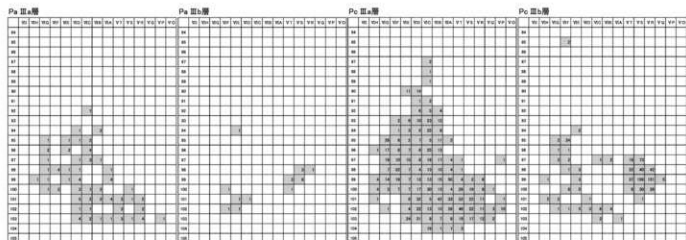


171図 北盛土石器出土点数(グリッド)石鏃へ石匙

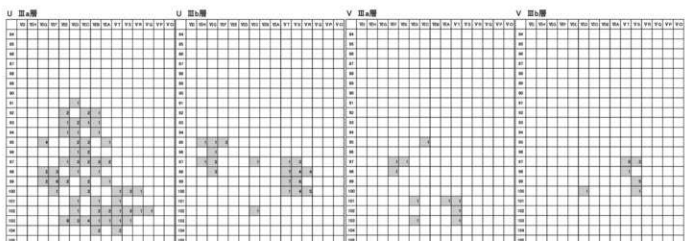
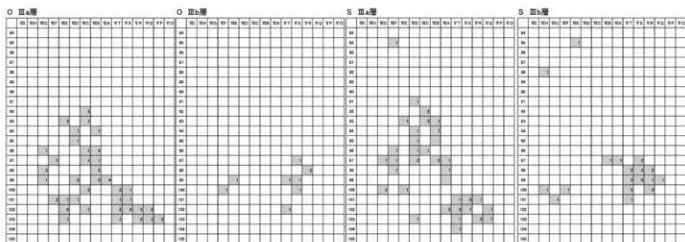
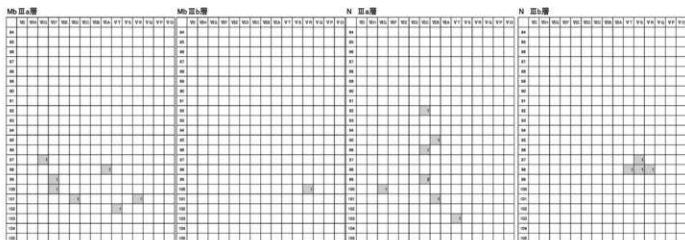
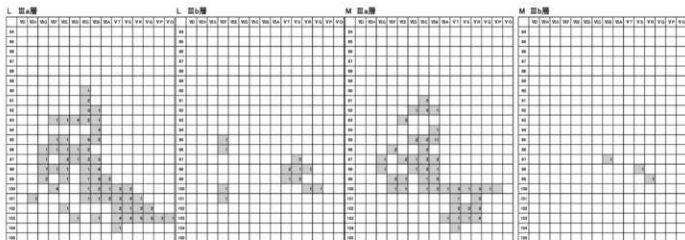


172図 北盛土石器出土点数(グリッド)石錐～石斧

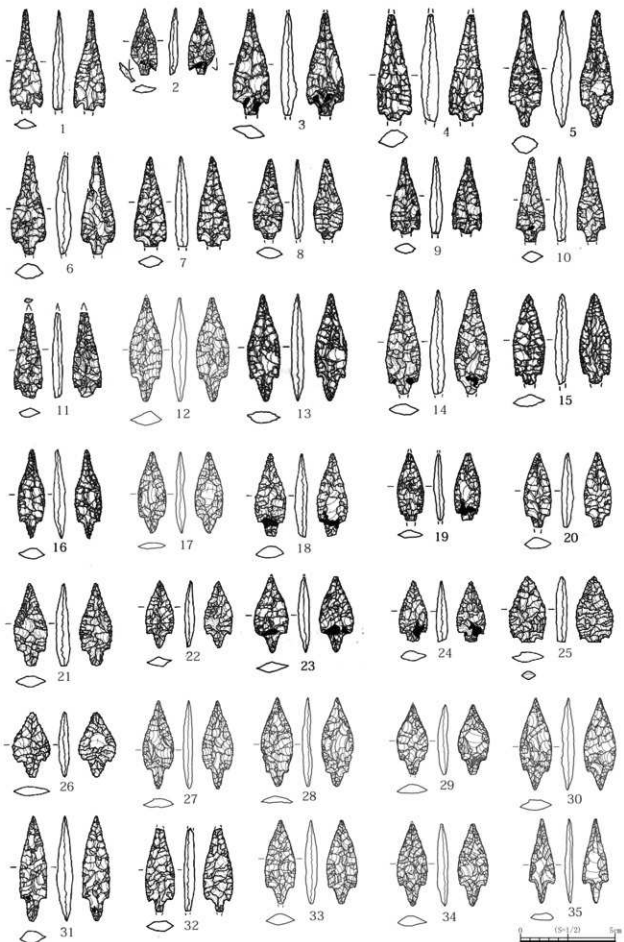




173図 北盛土石器出土点数（グリッド）石核～挟入扁平磨製石器

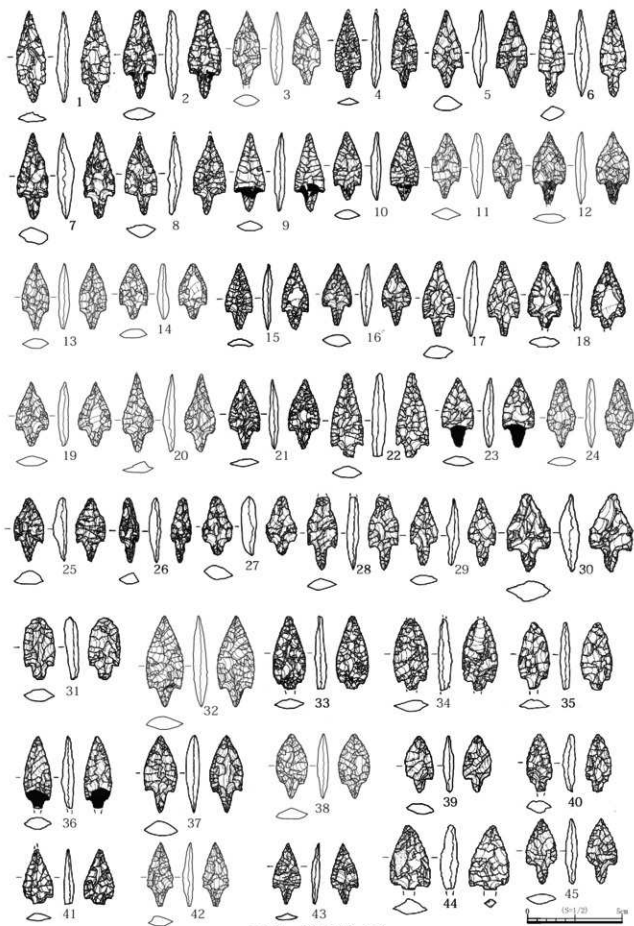


174図 北盛土石器出土点数(グリッド)石皿～擦切具



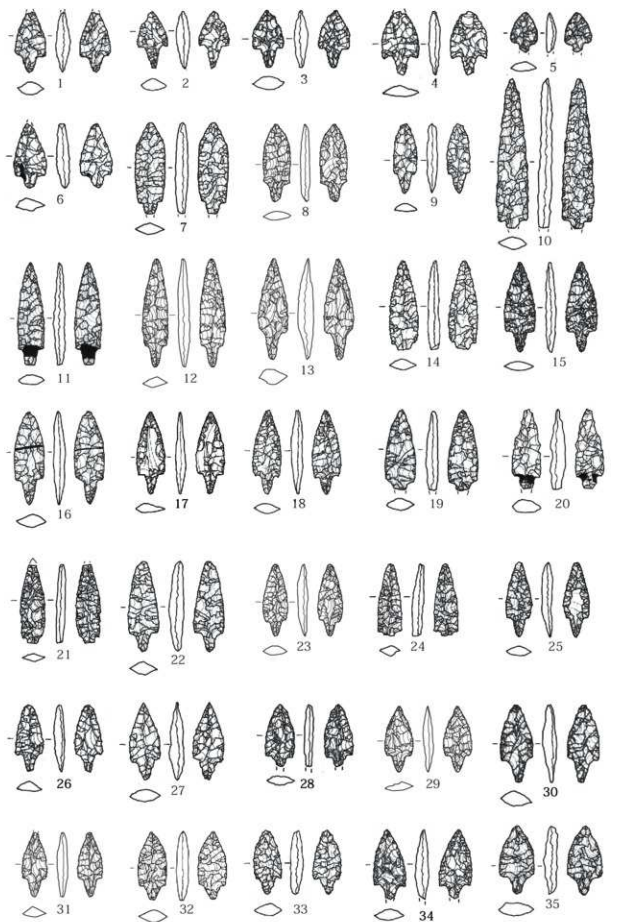
175図 剥片石器 (1)

黒塗りとアミかけは  
アスファルト付着



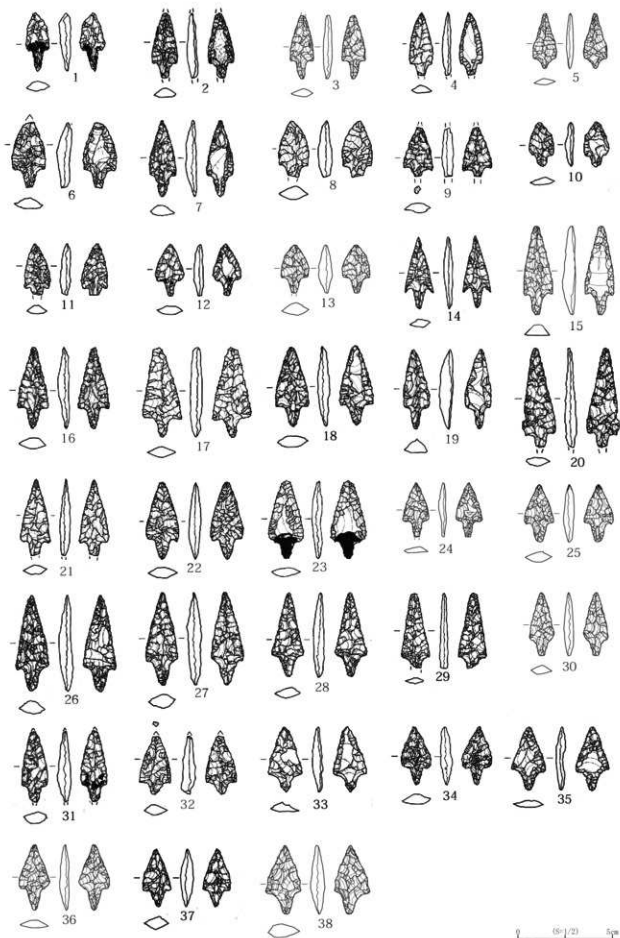
176図 剥片石器 (2)

黒塗りとアミかけは  
アスファルト付着



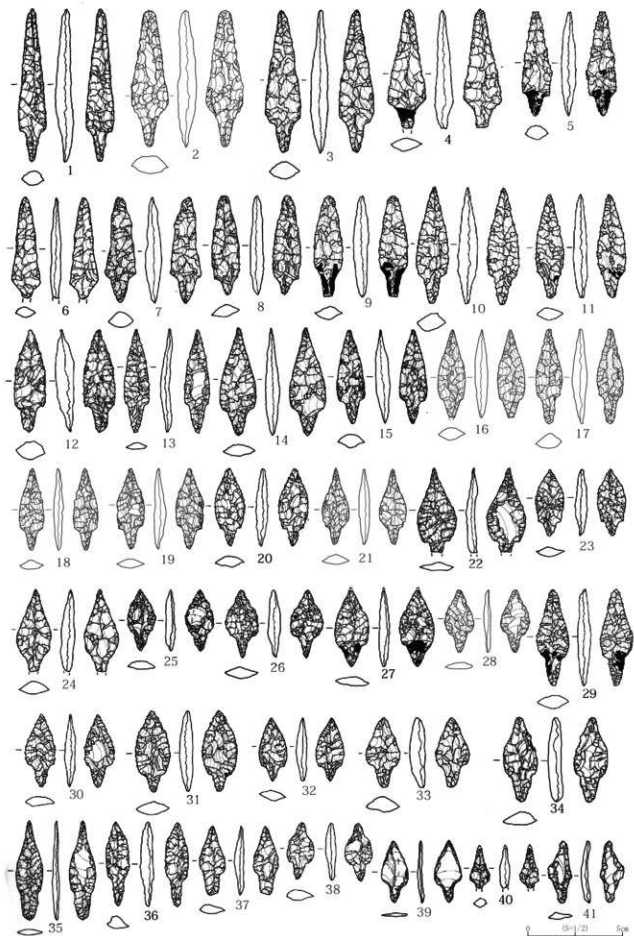
黒塗りはアスファルト付着

177図 剥片石器 (3)



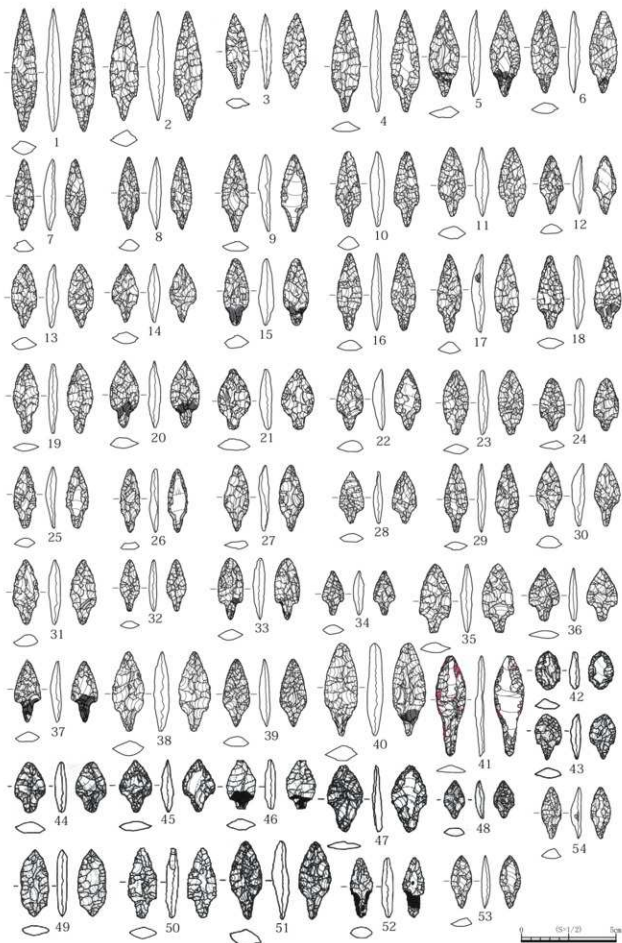
178図 剥片石器 (4)

黒塗りはアスファルト付着



179図 剥片石器 (5)

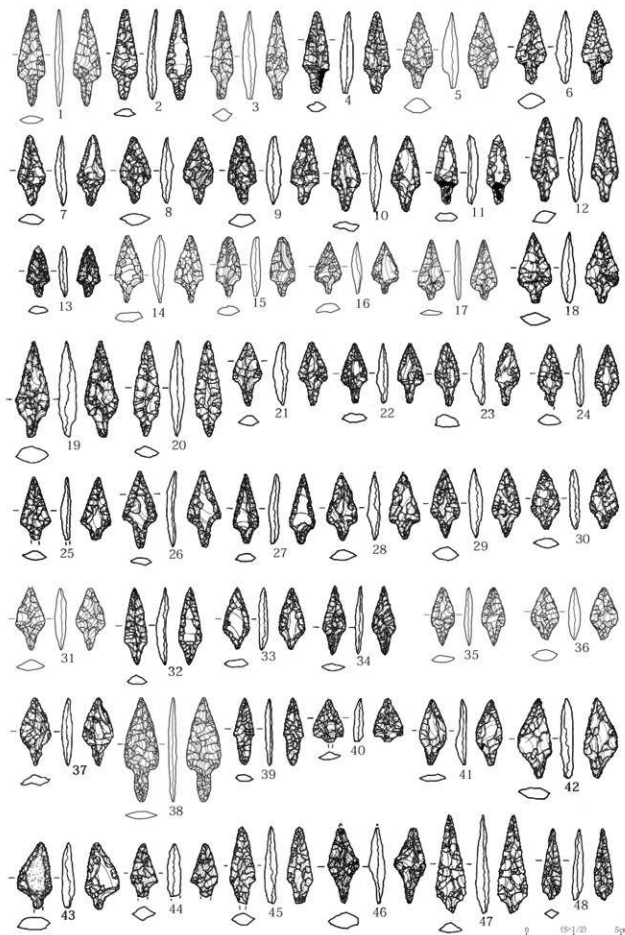
黒塗りはアスファルト付着



180図 剥片石器 (6)

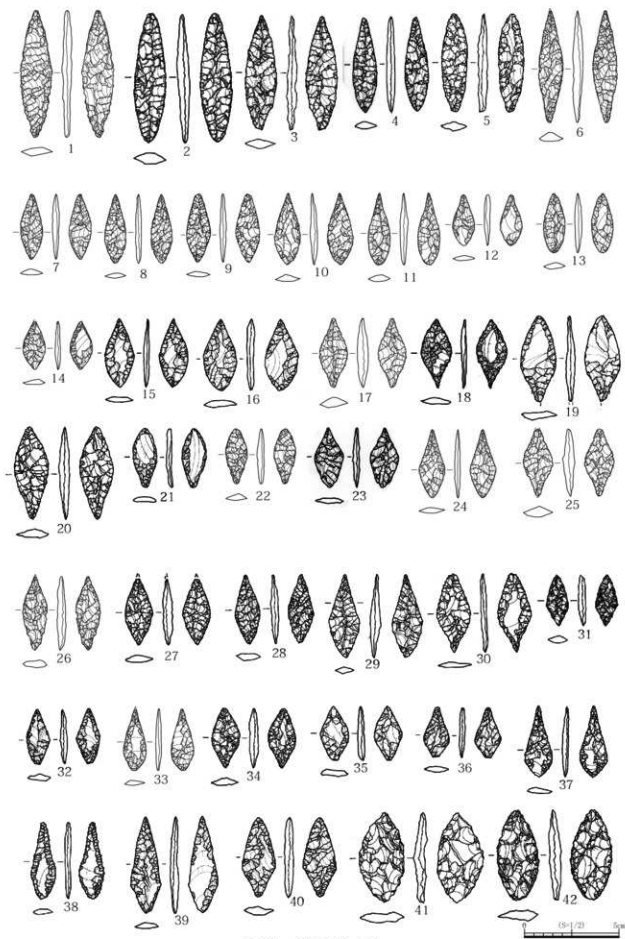
黒塗りとアミかけは  
 アスファルト付着  
 赤色は赤色顔料付着



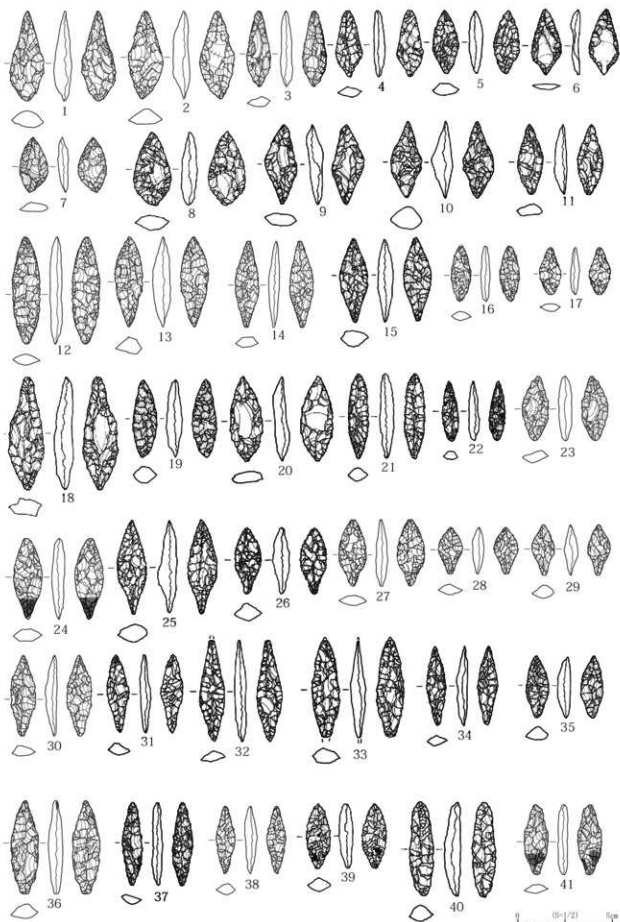


181図 剥片石器 (7)

黒塗りはアスファルト付着

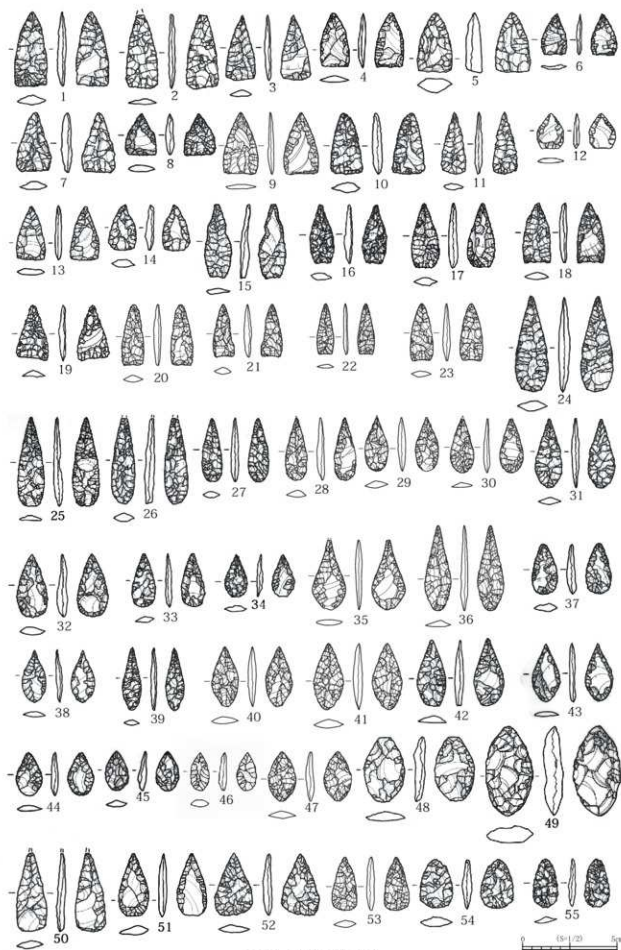


182圖 剥片石器(8)

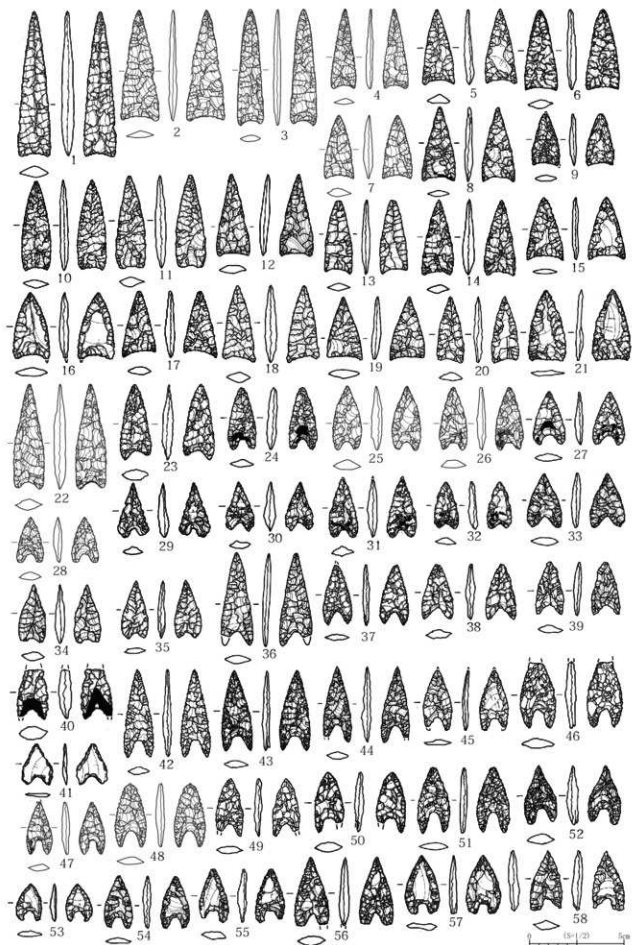


183図 剥片石器 (9)

黒塗りとアミかけは  
アスファルト付着

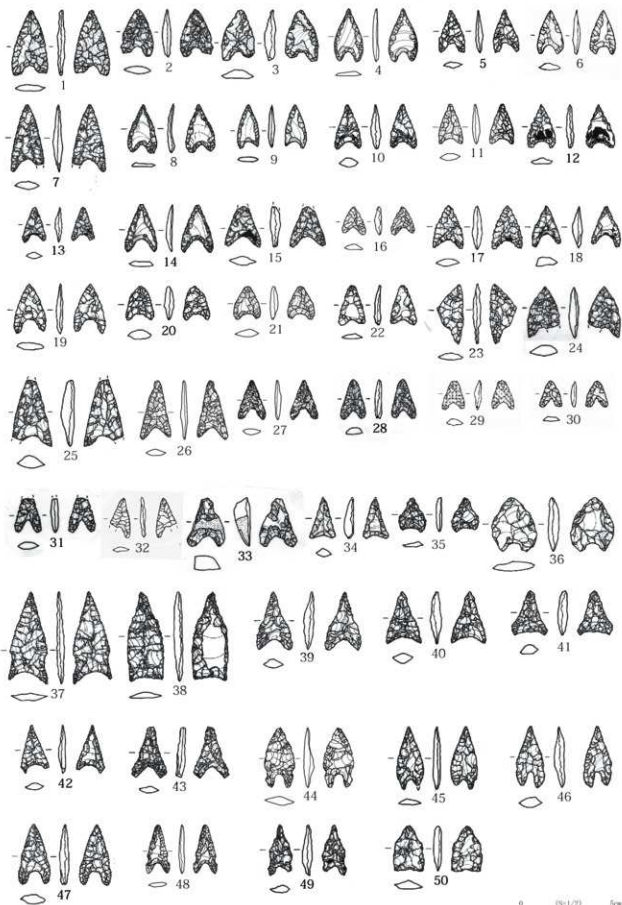


184图 剥片石器 (10)



185図 剥片石器 (11)

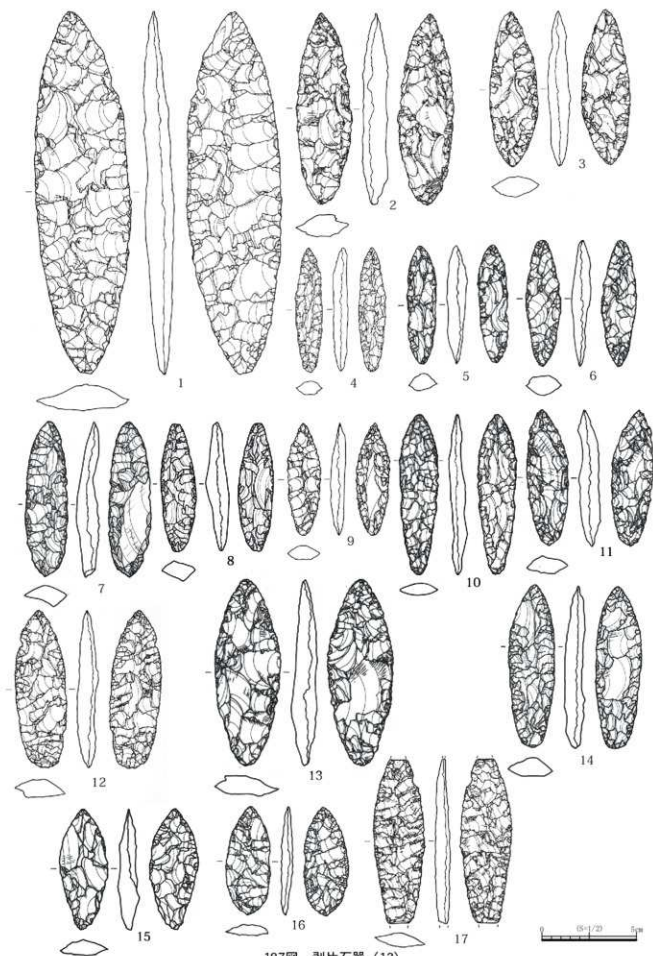
黒塗りはアスファルト付着



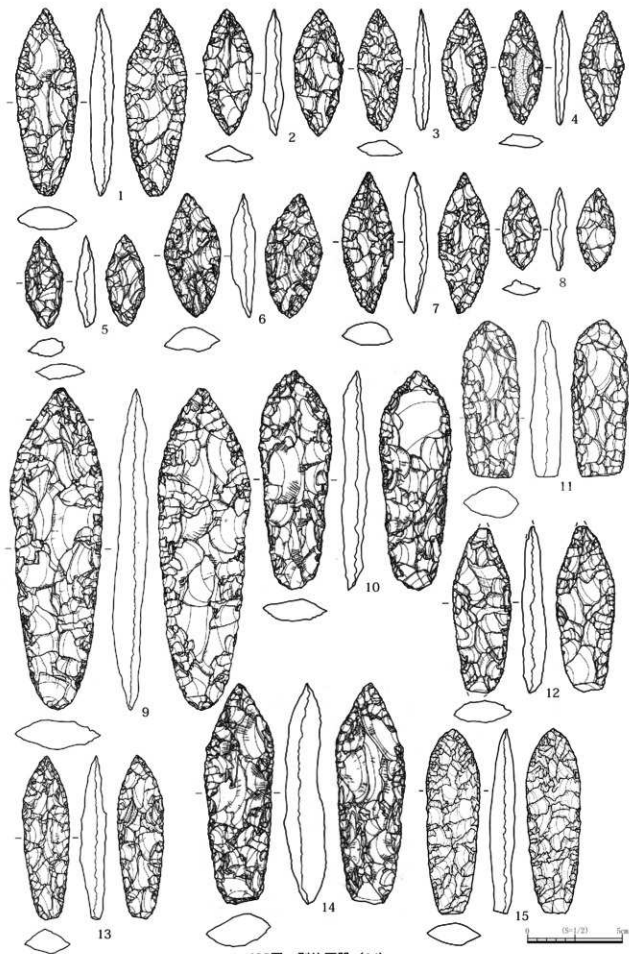
186図 剥片石器 (12)

0 10 20 50mm

黒塗りはアスファルト付着

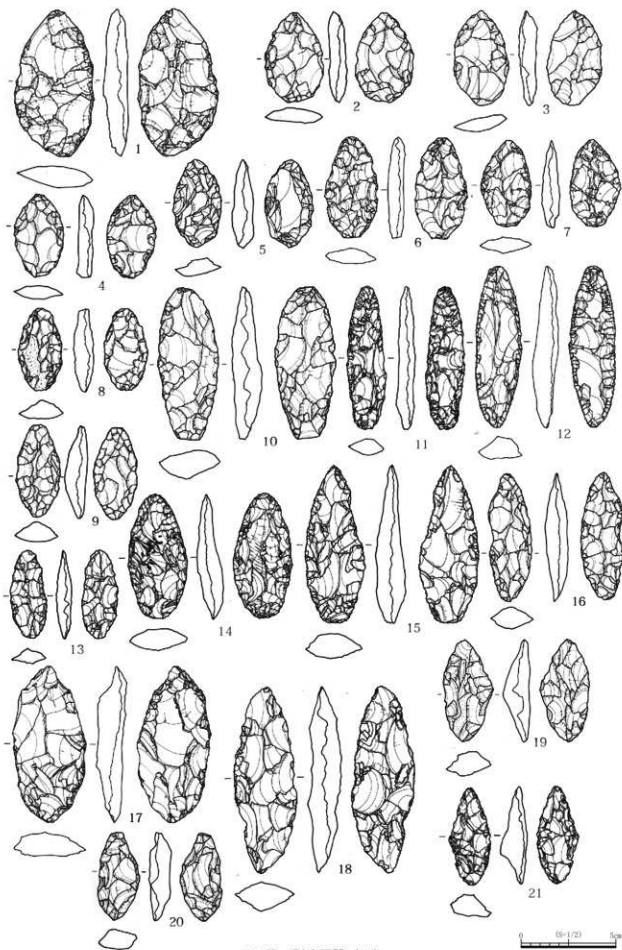


187图 剥片石器 (13)



188圖 剥片石器 (14)

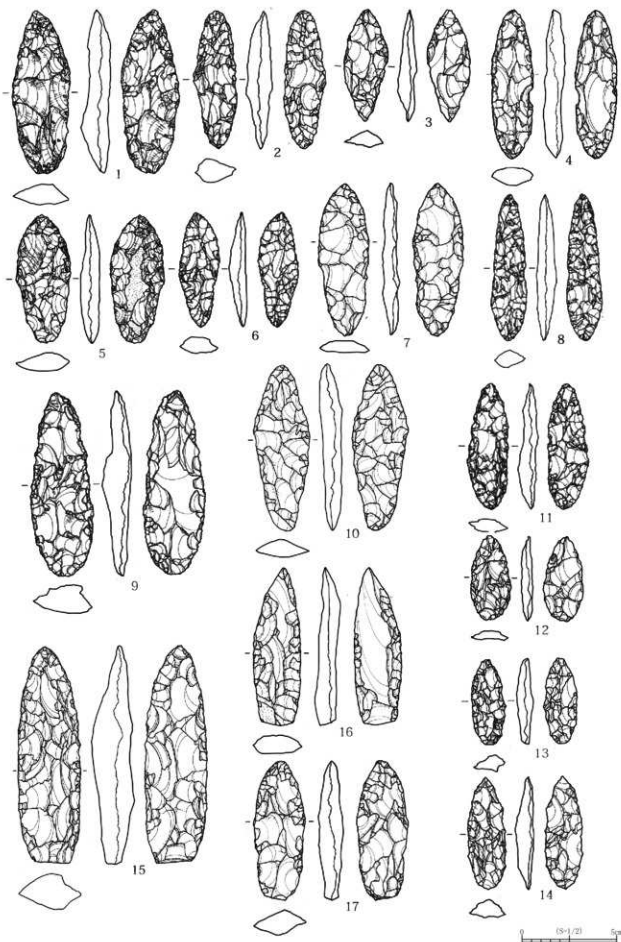




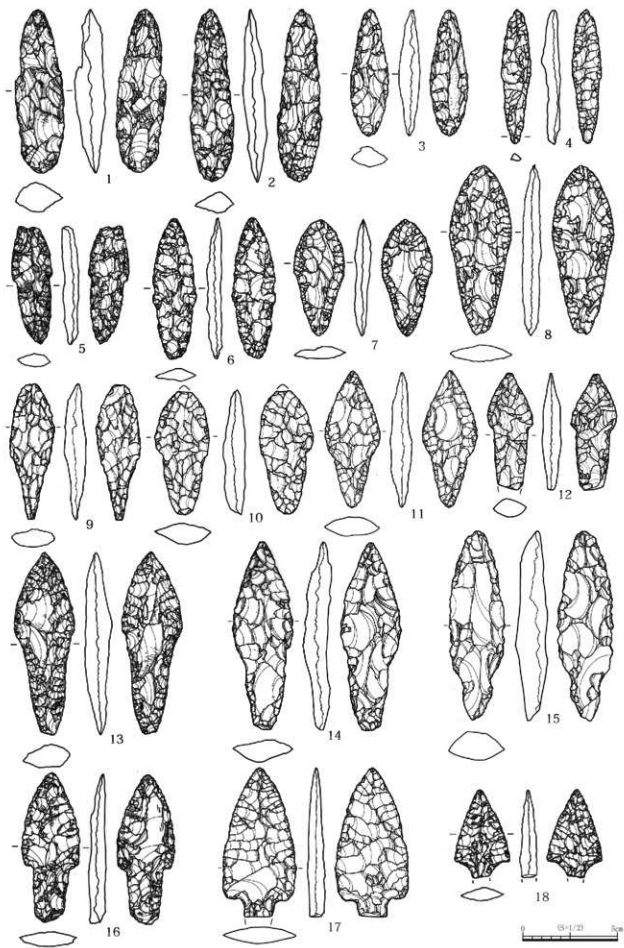
189図 剥片石器 (15)

0 1cm 5cm

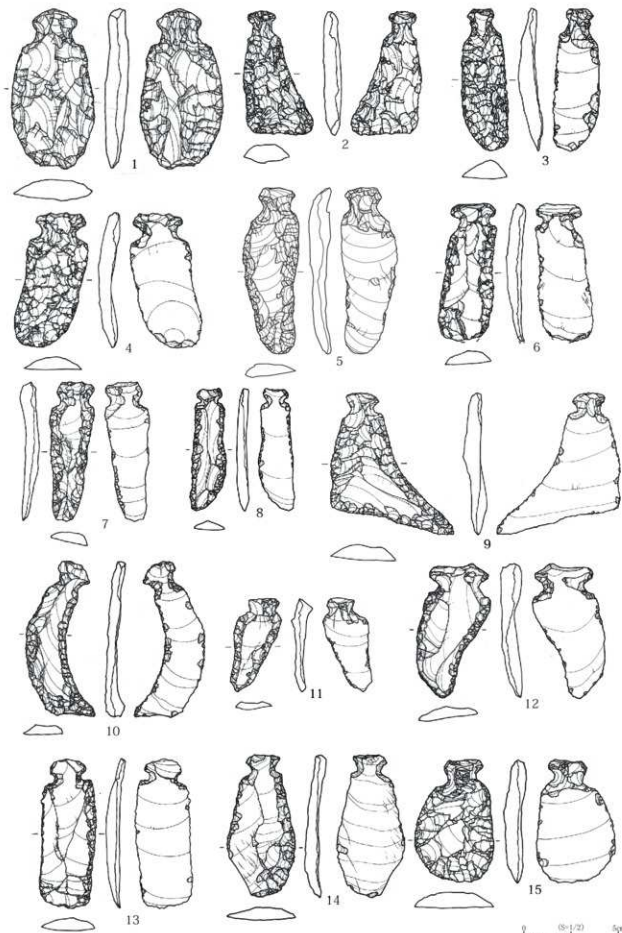
黒塗りはアスファルト付着



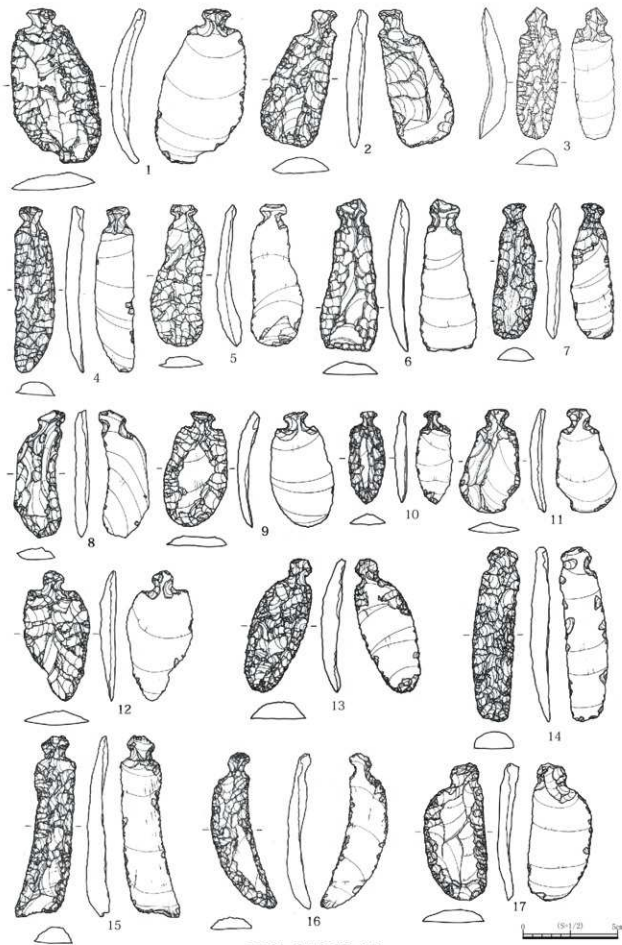
190圖 剥片石器 (16)



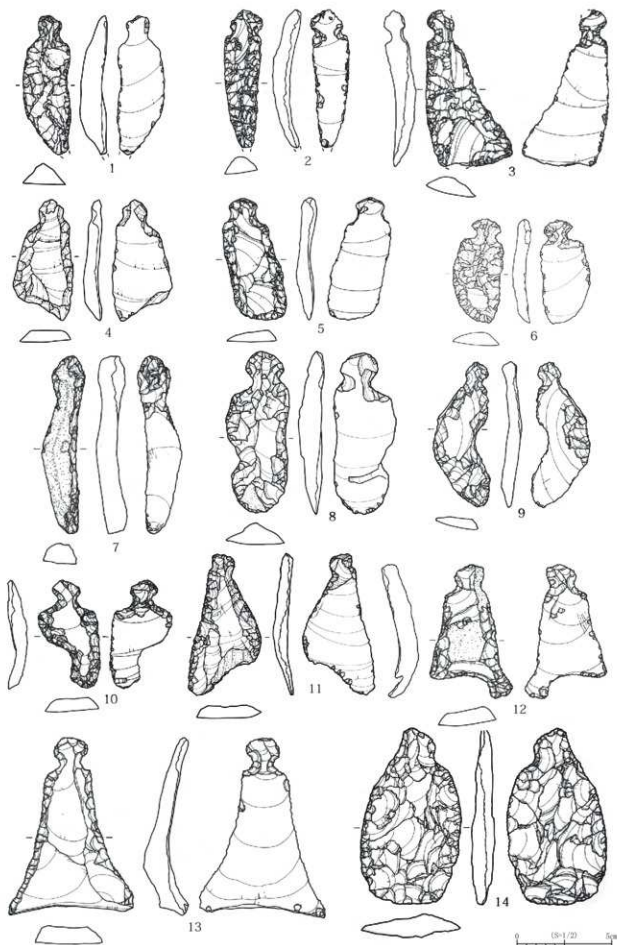
191圖 剥片石器 (17)



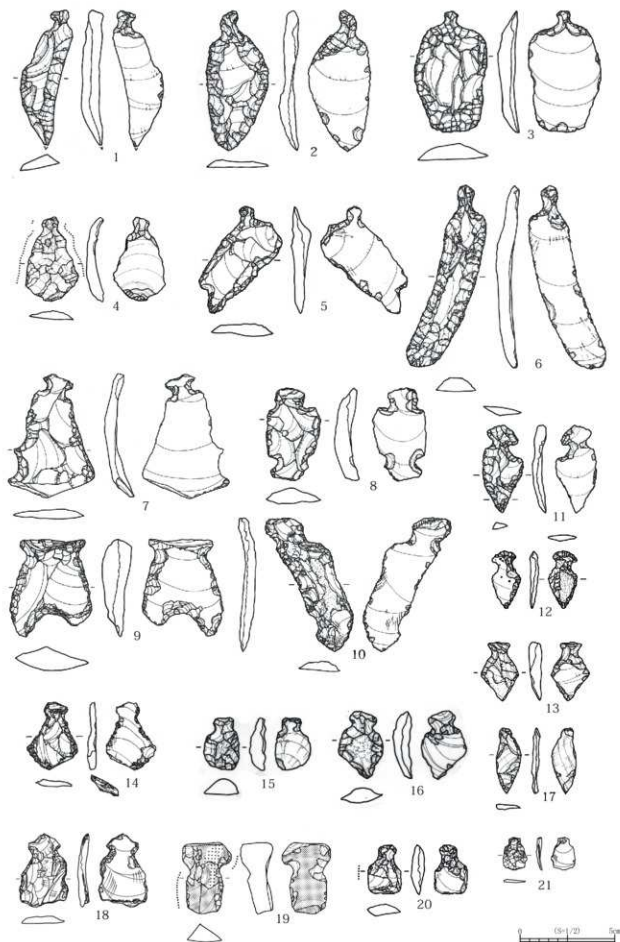
192圖 剥片石器 (18)



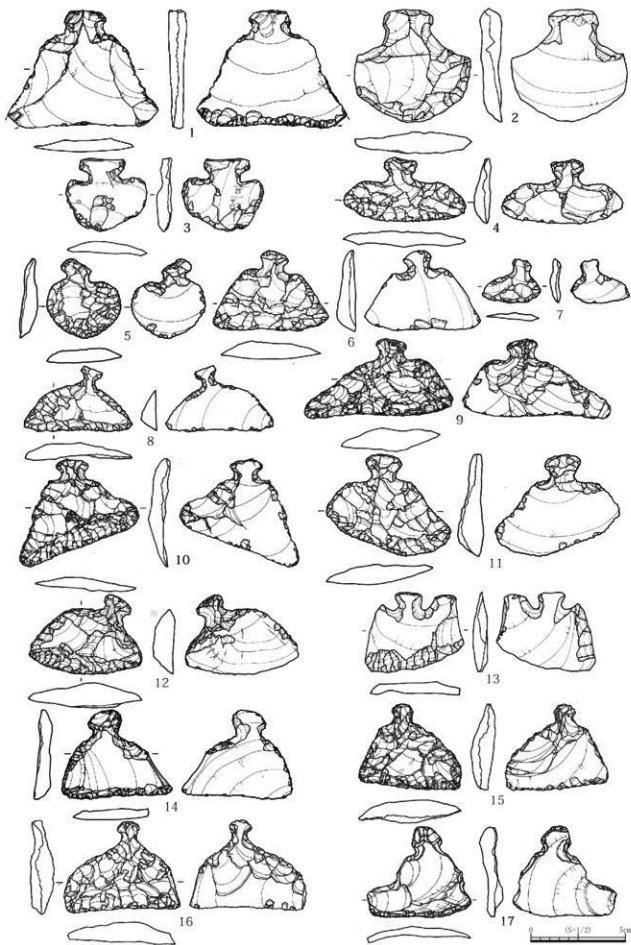
193图 剥片石器 (19)



194图 剥片石器 (20)



195图 剥片石器 (21)



196图 剥片石器 (22)